『人類学研究所 研究論集』第 7 号（2019）
Research Papers of the Anthropological Institute Vol.7 (2019)

安らかならぬ楽園のいまを生きる
――日本人ウブド愛好家とそのリキッド・ホーム――

吉田　竹也

キーワード
リスク社会、リキッド・ホーム、楽園観光地バリ、日本人ウブド愛好家

１．序　リキッド・ホームと楽園観光

高度経済成長期の日本では、家族の日々の喜怒哀楽を描いた「ホームドラマ」が人気を博し、これを茶の間で家族がそろって視聴していた。石井ふく子がプロデューサーをつとめた木曜夜 8 時の「肝っ玉かあさん」（1968 年～72 年）や「ありがとう」（1970 年～75 年）はその代表格である。取り立てて劇的な展開があるわけではないそうしたホームドラマの設定やコンセプトは、しかし、おそらく現実社会を反映して（cf. 見田 2006; 宮本・岩上（編）2014; 大澤 2008）、その後変わっていった。おなじく石井がプロデューサーをつとめた「渡る世間は鬼ばかり」（1990 年～2011 年）は、婚出した 5 人の娘たちが次々と直面する諸問題を重層的に描き、同時代の家族の絆のもろさやほつれを前景化した。「ひとつ屋根の下」（1993 年、続編は 1997 年）は、交通事故で両親を失いバラバラに育っていた兄弟姉妹がともに暮らしはじめたものの、最後に不条理な事件にさらされる様を描いた悲劇といってよいものであった。「ホームドラマ！」（2004 年）は、東南アジア旅行中の事故で家族や恋人をそれぞれ失った人々がともに生活をはじめるという、いわば逆立ちしたホームドラマであった。バブル後の長期にわたる経済停滞、離婚率・生涯未婚率・高齢化率の上昇と出生率の低下、貧困層の拡大ないし顕在化、これを受けた「子ども食堂」の増加、災害や DV による長期避難生活などが示すように、さまざまなリスクや危機に直面する今日の日本人にとって、家族や家庭はもはや自明の存在ではない。

「ホーム」は、一般に、家族や家庭から故郷そして本国にまで広がる、居心地のよい安らぎの居場所であり帰還のトポスである。そこは、ギデンズのいう「存在論的安心」を与えてくれるがゆえに、当事者にとってホームと認識されるのであり、この点で、あらかじめ存在するものというよりもむしろ当事者によって見出されるものである。ただ、グローバル化し「世界リスク社会」化した現代では、液状性と可動性の高まりが生とアイデンティティのあり方に絶えず再構築ないし脱構築を迫っており、親密圏と公共圏の境界が流動化する中で、ホームに相当する生活の場は過度の合理化や管理社会化による切り崩しを受け、かならずしも確たる安らぎの居場所ではなくなっている。ベック夫妻は、チェルノブイリ原発事故後の世界において他者というカテゴリーは終焉したと述べた。むろん、内戦・難民問題・政治の右傾化傾向などに照らせば、他者というカテゴリーが意味を喪失したとはいえない。ただ、

他者と自己との境界は流動化・液状化しており、それに連動して内なるホームと外なるアウェイとの境界も流動化・液状化している。こうした事態を、オジェは「非ー場所」の増殖として主題化し、伊豫谷は「故郷」の喪失、「居場所」の崩壊、国民国家の溶解、自らの帰るべき場所の喪失、などと切り分けて呼ぶ。たとえば、EU や北米を目指す難民にとって、それらアウェイの彼方の地こそホームたるべきものなのである（Augé 2017(1992): 104-106, 121-125; Bauman 2001(2000), 2012(2006); Bauman & May 2016(2001): 206-213; Beck 1998(1986), 2003(2002), 2014(1999/1993); Beck & Beck-Gernsheim 2014(2011): 116; Beck, Giddens & Lash 1997(1994); Benson & Osbaldiston 2014b: 4-5; Clliford 2002(1997): 15-17; Deleuze 2007(1990); Elliott & Urry 2016(2010): 4-10, 122-130; Giddens 2001(1999), 2005(1991): 38-60; Habermas 1987(1981), 1994(1990/1962); 伊豫谷 2013(編), 2014a: 7, 2014b: 306, 309-310, 321; Kaplan 2003(1996); Krastev 2018(2017); 中森 2017; Urry 2014(2003), 2015(2007))。

バウマンを参照していえば、現代人は、落ち着くことのできる居場所の喪失に直面しており、居場所に相当するものがどこにでもあるかのようで、十全なものとしてはどこにも見出せなくなっている[1]。われわれは、確かなものとはいえない複数のアイデンティティと複数の居場所とともに生きざるをえない。だからこそ、安らぎのホームを想像し熱望するのである（Bauman 2007(2004): 38-39, 2008(2001): 206-208）。私は、現代のリスク社会における「ホーム」を、こうした想像の次元にあって希求される、だが捕まえようとしてもすり抜けていくことがある、安らぎの居場所／帰還のトポスと捉えることから、議論を出発させたい。この当事者がもつ理念や理想と、直面する現実との間に場合によってはあるずれこそ、本稿の関心の所在である。バウマンがいうリキッド・ライフを、当事者たちはしっかりと――つまりソリッドなライフとして――生きようとするが、リスク社会にあってはかならずしもその企図は成就しない。それもあって、定着と非定着、停留と移動、定住と移住、帰還と出発といった概念の間に明確な境界線を引くことは、今日ますます困難になっている（伊豫谷 2014a: 6-8, 齋藤 2018）。本稿は、このアウェイと溶け合う状況にある「リキッド・ホーム」に焦点を当てようとする。

卑近な例を挙げよう。日本の大都市圏に暮らす人々の中には、職場や学校と住まいとの間の数十キロメートルを毎日往復し、月に 1 度は百キロメートル以上離れたところにある家族の住む家に帰り、年に 1～2 度はさらに数百キロメートル離れた故郷にある実家に帰省する、という生活を送る人々が一定数いる。その場合、彼らにとって「ホーム」と呼べるものは複数あるといえる。これは、エリオットとアーリがいう「モバイル・ライフ」の具体でもある（Elliott & Urry 2016(2010): 33-37, 113-116）。ただ、アーリらは、他者からみれば「ホーム」にみえるであろうものが当人にとっては実はそうではない状況もあるという、現実の相互主観的で多元的な構成には注目しようとしない。しかし、現代人にとってのホームの内実を論じる上では、むしろここに留意すべきであろう。たとえば、毎朝出発し夜戻るひとり暮らしのアパートは、居心地のよい我が家には到底感じられないかもしれない。たがいの愛

[1] バウマンは現代の難民や移民を念頭においているが、ホームのない人々、あるいはホームから排除されて生きる人々は、ローカルな共同体社会の中にも存在した。たとえば、沖縄の例については中村らの文献を参照する（中村 2014; 打越 2014; 上間 2017）。

情や親密性が希薄化した配偶者や子が待つ家への毎月の帰宅は、温かい家庭への帰還ではなく、冷たいアウェイの戦場への出発であるかもしれない。そして、そうした日々の疲労とストレスに耐える彼や彼女が心から「ホームに帰った」と実感できる場所は、盆暮に訪れる年老いた親と先祖の墓が待つ田舎ではなく、数日の休暇を年に 2 度取って訪れる南の島の「楽園」であるかもしれない。他者からみればおよそ「ホーム」とは無関係の、生まれや育ちにまったく無縁の、遠く離れた青い海とヤシの木の島こそ、心身をリフレッシュできる安らぎのホームであるという人々は、日本の内にも外にも確実にいる。リキッド・モダニティにおけるリキッド・ホームは、主体によってさまざまでありうる。

ここで、現代社会のメカニズムと「楽園」を求める観光との関係について、簡単に整理しておきたい。リスク社会化と管理社会化の進む現代において[2]、人々は、心身の疲労を回復させたり気分転換をはかったりすることで健康を維持しなければならないというイデオロギーとハビトゥスを内面化するようになった。そして、リクリエーション活動に並々ならぬ関心を向けるようになった。飲酒、賭博、あるいは性サービスの享受など、以前から男性をおもな主体として存在した享楽的行為は、かならずしも衰退しているわけではないが、心身の健全さを増進させるという観点からすれば、決して好ましいものではない。むしろ、スポーツ、運動、読書、芸術などが、余暇活動を過ごす趣味の候補としては選好される。こうして、ある程度の経済的そして時間的余裕を有する人々を中心として、特定の趣味に時間をかける余暇活動＝消費活動が社会の中で興隆し、それがさらなるサービス産業の伸長をもたらすという円環が発生した。観光は、日常生活から離れた場所に一時的に赴くことによって、日々の生活の中でのストレスを解放し心身をリフレッシュすることを目的とする、肯定的に評価される余暇活動のひとつであり、現代人にとっての一種の必需品的活動として伸長した。そうした観光のひとつのあり方として、生活圏のかなたに存在する「楽園」に癒しを求める「楽園観光」がある。代表的な楽園観光地としては、ハワイ、グアム、バリ、カリブ、沖縄などがある。20 世紀後半以降の大衆観光化の時代には、世界の各地であらたな楽園観光地の開発が進み、既存の楽園観光地もさらなるヴァージョンアップを受けた。楽園観光は、時空間の圧縮、リスク社会化、心身の健康の管理化をかつてないまで高める現代に発展した、社会現象のひとつである（Elliott & Urry 2016(2010): 122-130; 三上 2010, 2013; 美馬 2012: 41, 43, 60-67; Rose 1998(1992): 2-4; 山下 2006; 吉田 2013b, 2016a）。

リキッド・ライフとモバイル・ライフの全盛時代、観光は、地縁・血縁・出生等にもとづくのではなく、イメージにもとづいて希求される新たなホームという選択肢を、人々に追加した。こうして、現代人のホームの多様性・多数性・流動性・溶解性はより高まった。ただ、恵まれた人々がホームの豊穣性を享受しうる一方で、安心できるホームや居場所を求めても得られない人々はなお多数存在する。その広がりや格差を念頭におきつつ、特定の民族誌的事実の探求に向かうことにしたい。取り上げるのは楽園バリの例である。

２．日本人ウブド愛好家のアンビバレントなライフスタイル

[2] 私は、リスク社会化や管理社会化が、ヴェーバーのいう「合理化」メカニズムの現代社会における具体的な展開であると捉えている（吉田 2016b, 2016c, 2018）。詳細については、稿をあらためて論じたい。

インドネシアのバリ島には、ここを愛好し、ホームとみなして滞在する外国人が一定数存在する。このバリ愛好家の中に、相当数の日本人もいる。ここでは、内陸の観光地であるウブド（Ubud）に生活の拠点をおく「日本人ウブド愛好家」に焦点を当て、現代人のリキッドで揺らぐホームの一端を捉えようとする。なお、ここでいう「日本人」の中には、インドネシア国籍に変更した者や、アイデンティティの面で日イ両属的な者も含まれる（吉田 2004, 2005, 2013b）。

日本人ウブド愛好家は、総じて、日本から赤道直下のバリに向かう約 4000 キロメートルの旅路を、出発でもあるが帰還でもあると認識し、経済・物質面で豊かであっても精神面で疲労する日本よりも、あくせくしないのんびりしたバリ人的な生き方――彼らはそう認識するが、バリ人自身がそう認識しているかはまた別である――に魅力を感じる。前節で触れたような、毎年休暇を利用してバリを訪れるという短期の観光者もおおいが、バリ好きが高じて、中には、日本からウブドに生活の拠点を移す者、そして観光者相手のビジネスをはじめる者もいる。本稿でおもに取り上げるのは、こうした移住者に相当する人々である。

彼らにとって、ウブドはかけがえのない居場所であるが（cf. 吉田 2013b: 267）、だからといって、ウブドやバリがホームであり日本がアウェイである、という単純な割り振りはかならずしもできない。彼らは、ウブドをホームとみなしバリ人的なライフスタイルにシンパシーを感じながらも、日本人としてのアイデンティティやライフスタイルをまったく放棄したわけではなく、程度と頻度・期間はさまざまだが、「日本に帰る」という認識と機会をもっていた／いるからである。彼らは、どの程度意識的か無意識的かはともかく、「日本人としてウブドに生きる」というアンビバレントなライフスタイルを選んだのである。むろん、これはひとつの理念型である。彼らの具体的な生のあり方は、ほとんどバリ人のようにウブドに暮らすという極と、バリ人的な生のあり方をほとんど取り入れず、短期訪れる日本人観光者のようにウブドに暮らすという極との間の、相当な幅の中にある。また、ウブド移住後も中長期的に日本で暮らす期間を有する者もおり、この 2 つの極の間、またウブドと日本という 2 つのホーム（場合によっては他のホームも）の間を、行き来するというタイプの者もいる。さらに、落ち着いたウブドでの暮らしを思い描きながら、揺らぐホームに生きるという者もいる。彼らは、定着と非定着のはざま、ネーションやアイデンティティの面で日本とバリとのはざま、そして「楽園バリ」のイメージと現実のバリ社会とのはざまに、生きている（cf. Benson 2014(2011); Benson & Osbaldiston 2014b: 15-16; O'Reilly & Benson 2016(2009): 3, 9）。本稿は、こうした彼らのホームの幅と揺れや変化に注目しようとする。

こうした主題をより明確にするために、議論枠組みや視座に関して 4 点を確認しておく。

まず、本稿の主題は、バリやウブドに在住する日本人の典型的なホームのあり方を一般化し提示することにではなく、日本人ウブド愛好家のホームに関する認識や経験の具体例を個性記述的な民族誌的研究として提示することにある。これが第 1 点である。彼らの生は相当な幅の中にある。そもそも、彼らはそれぞれの事情で別々にウブドという観光地に居場所を見出し移住したのであって、一部の人々はたがいに知人であるものの、一部の人々はまったく人間関係のネットワークに入っておらず、彼らが全体としてひとつのコミュニティを形成しているとはいえない。本稿では、彼らのライフスタイルやホームの多様なあり方の一端を、その背景にあるウブドというグローカルな観光地がもつ特徴やメカニズムに照ら

しつつ、記述することに、まずは専念しようとする。

次に、関連する先行研究に触れる。近年、移民研究の新たな領域としてライフスタイル移住論が伸長している（ex. Benson 2014(2011); Benson & O'Reilly (ed.) 2016(2009); Benson & Osbaldiston (ed.) 2014a; 藤田 2008; Janoschka & Haas (ed.) 2017(2014)a; 加藤 2009; 長友 2013; Sato 2001; O'Reilly & Benson 2016(2009): 10-11; 吉原 2016b)。「移民」――ただし、私は「移住者」がより適切な表現であると考える――は、植民、難民、出稼ぎ者や留学者などを含み、研究者によりその定義や範疇も異なる。従来の研究は、政治的・経済的な理由から移住を余儀なくされた集団をおもな対象とする傾向があったが、グローバル化の進む現代では、中間層に当たる人々が、よりよい生活の質、教育環境・住環境、自分らしい生き方などを求めて、ネット情報や LCC なども駆使しつつ、個人化したかたちで、多様な形態の移住をするようになっている。こうした現象がライフスタイル移住として主題化されており、本稿も大枠においてこの種の研究の一端をなす。とくに、観光論との接続をはかりつつ、「移住」概念を長期滞在から比較的短い旅行まで、定住から移動までの幅の中で捉える視点を、本稿は参照している[3]（Haans; Janoschka & Rodriguez 2017(2014): 208, 210; Janoschka & Haas 2017(2014)b: 1-2; Korpela 2016(2009): 27; 藤田 2008: 23-25; 森本・森茂 2018; 長友 2013: 14-32, 139-145, 2017: 128-129; cf. 伊豫谷 2014a, 2014b)。

このライフスタイル移住研究を取り込んだ視点からバリに住む日本人を主題とした先行研究としては、バリ人と結婚した女性におもに焦点を当てた、山下や吉原らによる議論がある（山下 2009: 31-36; 吉原（編）2008; 吉原・センドラ・ブディアナ 2009; 吉原・今野・松本（編）2016)。たとえば、吉原は、「移民の社会学」を志向しつつ、コミュニティ論やネットワーク論を主題の中心に据えようとする立場に立つ（吉原 2016a: 12)。一方、本稿は、コミュニティではなくホームを主題とし、これを想像の次元にあるものとみなすとともに、ホームとアウェイ、停留・定住と移動・移住との間の線引きが困難な現代社会に生きる人々のホームの揺れや多様性を捉えようとする立場に立つ。ライフスタイル移住論の中でも論者によって立場の違いはあるが、本稿の関心は、現代のリスク社会に生きる人々がソリッド・ホームを求めながらも、ときにリキッド・ホームに生きざるを得ない実態を、ウブドの日本人を事例に理解しようとすることにある[4]。これが第 2 点である。

---

[3] 本稿で記述するウブド在住日本人においては、「居場所を求める」という認識ないし心情は大なり小なりあっても、移住者としての自己認識は希薄である。初期の新参者であったときには「移住」という認識をもっていたかもしれないが、ウブドで暮らしつづける中でそうした認識は失われていった可能性もある。そうした初期の契機をとくに重視するのでなければ、彼らの今日にいたるウブドでの生は、移住と定住を連続線上にあるものとみなす立場から、理解されてよいと考えられる。なお、このことは、「観光」と「移住」といった概念の再検討・再構築というおおきな主題に波及する。それは今後の課題としておきたい。

[4] ライフスタイル移住論では、リキッド・モダニティ、個人化、移住者の階級認識、現地の人々との軋轢などへの論及はあるものの（Benson & Osbaldiston 2014b: 13-15; Janoschka & Haas 2017(2014); O'Reilly & Benson 2016(2009))、本稿でいうリキッド・ホームの実態や、管理社会化・リスク社会化への目配り、（偽装）難民との理論的架橋可能性といった点は、管見のかぎり十分論じられていない（cf. Benson 2014(2011); Korpela 2014: 13-15; Salazar 2014: 133-134)。観光者が主体的に観光を楽しむその背後に、心身のリフレッシュを強いる生権力と自己管理の社会メカニズムがあるように、ライフスタイル移住の興隆の背後にも、安らぎのホームでよりよき生を生きる選択を自ら主体的におこなうように強い

第 3 は、これらバリ在住日本人を取り上げた先行研究が、もっぱらバリ人と結婚した女性に着目している点についてである（山下 2009: 30-36, 42-48; 吉原 2016a: 7, 2016b: 43-44）。そこにはジェンダー論の観点からあらためて慎重に検討されるべきところがあるように思われるが（cf. 加藤 2009: 202-248）、ここでその問題に踏み込むことはしない。ただ、民族誌的データの蓄積という点では、バリで暮らす日本人男性やいわゆる LGBTQ についての記述と検討もなされてしかるべきであろうことは、言を俟たない。さしあたり、本稿では、男性の事例を上乗せすることに留意することにしたい。ただし、繰り返すが、そこから一般化した論点を導くことがねらいなのではない。

第 4 に、上の第 2 点とも関連するが、本稿では民族誌的記述において時間軸を導入する。人々のホームをめぐる認識や実践は一定の揺れ幅をもち、それは時間の流れとともに変わりうる、と考えられる。ここでは、1990 年代から 2010 年代半ばまでの約四半世紀にわたる私のウブドでの断続的な参与観察とその中で蓄積したインタビューデータに照らして、リスク社会化の様相を深める観光地バリに生きる彼らにとってのホームがいかに変わっていったのかに注目しようとする。バリ在住の日本人は、当初のんびりした暮らしにあこがれてウブドという観光地に居場所を見出したのではあるが、バリにおいても急激な社会変化はやはり避けがたい事態であって、彼らが予期せぬリスクの顕在化にさらされるという事態も生じた。ここでは、そうした事態やその経緯にも触れながら、一定の時間の中に当事者にとってのホームの揺らぎを位置づけ理解しようとする。

本稿の記述は、公的な社会的空間における現象よりも、むしろ個人の私的領域に関わる部分に着目するものとなる。プライベートなものはパブリックなものとおなじく社会的事実にほかならない。ただ、セクシュアリティ研究がそうであるように、そうしたプライベートなものをインタビューや参与観察によって明らかにするという作業や、それをめぐる方法論を、これまでの人類学や社会学の諸研究が十分なかたちで提示してきたとはいえないであろう。ここには個人情報をめぐる問題もある。読者各位には、プライバシーの保護と尊重に極力配慮して以下をお読みいただきたい、と願う次第である。

以下、第 3 節では、バリとウブドについて概観するとともに、1990 年代から今日にいたるバリ観光の変動について確認する。第 4 節では、2018 年 8 月現在での、ウブドの日本人にとってのホームの具体的なあり方を数人に絞って記述する[5]。そして第 5 節では、リスク論の観点からこうした彼らのライフスタイルについて若干の点を確認し、議論をまとめる。

３．熱帯の楽園の観光の危機

バリは、インドネシア随一の、またアセアンでも有数の、国際的観光地である。2015 年のインドネシア入域外国人観光者は 1023 万人であり、その 38%に当たる約 394 万人がバリ国際空港に降り立った。国内観光者も伸長をつづけており、2012 年には 606 万人の国内観光者がバリを訪れ、その後も増加傾向にある。2011 年にバリ州知事が表明した、2015 年

る、リスク社会における生権力の支配構造があると考えられる。

[5] インタビューでは、インフォーマントの語りの流れに乗ったかたちで情報収集をおこなったため、第 4 節における各事例の記述内容は、かならずしも相互に対応し合ったものにはなっていないことを、あらかじめお断りしておく。

までに外国人観光者 500 万人・国内観光者 1000 万人という目標は達成できなかったものの、国内外の観光者 1000 万人超を受け入れる今日のバリ社会は、現地の人々が好むと好まざるとにかかわらず、観光に深く規定されている（Byczek 2010: 57-58; Cuthbert 2015: 338; http://thedevelopmentadvisor.com/news/bali-domestic-tourist-arrivals-increase/; http://www.bps.go.id/linkTabelStatis/view/id/1387）。

バリの観光地化は、オランダ植民地支配下の 20 世紀前半にはじまった。その起点にあったのは、バリを「楽園」とみなす、欧米人のオリエンタリスティックでロマンティシズムあふれるまなざしであった。1914 年に、オランダ王立郵船会社（KPM）は、はじめてバリを東インド観光の広告パンフレットに盛り込んだ。KPM が作成するその種のパンフレットやガイドブックには、いずれも熱帯の森・ヤシの木・水田の風景などの写真とともに、次のような文言がつかわれていた。「バリ／あなたはこの島を立ち去るとき、悲しみのため息をつくでしょう／あなたはずっとずっと、このエデンの園を忘れられない」（Vickers 1989(2000): 91-92, 2013: 20; 吉田 2005, 2013b）。

KPM は、1924 年にバリを含むオランダ領東インド諸島の主要なスポットを周遊する観光目的の定期船を就航させた。バリの観光地化はこれをもってはじまったといえる。KPM はバリ島内での観光事業も展開した。こうして定着したバリ島ツアーの基本は、湖・火口・村落などの自然や景観の観賞と、王宮・寺院・古代遺跡を見学する文化観光とを組み合わせたものであり、政府が伝統文化の保存の観点から奨励した絵画や彫刻が、観光者の買うみやげ物として人気を集めた。また、ガムラン音楽と舞踊や演劇などの観光者向けのライヴショーも、1920 年代末には定着した。今日バリでみられる、観光者向けの芸能（音楽、舞踊、劇）や美術工芸品（絵画、彫刻）の原型は、この時代にさかのぼる。1927 年からは火葬見学ツアーもはじまった。現在のバリ観光においては、ダイビングやサーフィンなどのマリンスポーツや、ハワイ型のリゾート観光、そして文化体験・自然体験・エコツアーなどが新たに付け加わっており、それに関連して新たな観光地も開発されているが、植民地時代のバリ観光の諸形態は、基本的にいまにも引き継がれている（Hitchcock & Putra 2007: 15; 永渕 1998: 67-82; Vickers 1989(2000): 93-97; 吉田 2013b; 吉田禎（編）1992: 32）。

バリの楽園観光地化の経緯やその構造的な特徴については、すでに拙論で論じたことがあるので（吉田 1997, 2011a, 2011b, 2013b）、ここでは、①戦前におけるバリ観光は小規模なものであり、おおめに見積もっても来訪者は年間 3 万人程度であったこと、②これにたいして、戦後の大衆観光時代における観光開発は異次元ともいえる大規模なものであり、かつ全島的な広がりをもつものとなったこと、③その戦後の観光開発は、「開発独裁」体制下の持続的な経済成長と資本投下を基盤とし、空港や州都デンパサール（Denpasar）に近い南部の海岸部、具体的にはサヌール（Sanur）・クタ（Kuta）・ヌサドゥア（Nusa Dua）の 3 地域を中心に展開したこと、④内陸部にあるウブドや、東部のチャンディダサ（Candi Dasa）、北部のロヴィナ（Lovina）などのいわば周辺部の観光地化は、こうした海岸部の開発にやや遅れ、1980 年代から本格化したこと、⑤これら④の観光地は、大型資本にもとづく③の主要観光地に比して、ローカルで小規模なビジネスを中心に成り立つという特徴をいまも有すること、を指摘するにとどめておく。では、次に、この④⑤を確認しつつ、観光地ウブドに目を向けることにしよう。

＊

ウブドという観光地は、ギャニヤール県ウブド郡のウブド行政村（Kelurahan Ubud）の中心部、およそ 10 集落にわたる観光関連施設の集在地域に広がる。ここでは、これを「観光地ウブド」あるいは単に「ウブド」と呼ぶことにする。ウブド行政村の周辺には、プリアタン（Peliatan）、ペネスタナン（Penestanan）、プゴセカン（Pengosekan）、ニュークニン（Nyuh Kuning）をはじめとする、観光地化したあるいはしつつある村々が展開している。以下では、これらを「ウブド周辺地域」と呼ぶことにする。

写真１　ウブドの老舗店舗 Nomad　　写真２　ウブド王宮を訪れる中国人団体客

ウブド最初のアートショップは 1950 年代に開業した。写真１の Nomad という名の飲食店はその後継店舗である（Vickers 2011: 466）。写真２は、南部バリの観光地からバスでウブドを訪れる中国人観光者である。中国・台湾からの観光客は増加傾向にある。

ウブドが観光地となる伏線は、植民地時代にあった。ウブド領主家は、19 世紀末から 20 世紀前半に急速に政治的影響力を高め、当時の 8 王家に次ぐ有力諸侯となり、周辺地域の儀礼を主導することで宗教文化的な権威の体制を確立させた。また、植民地時代のウブド愛好家であるヴァルター・シュピースやルドルフ・ボネら芸術家のパトロン的存在となって、ウブドを観光の文脈における芸術のセンターへと押し上げた。ウブド王宮の政治的・宗教的な力はそれ以降も持続したが、第二次世界大戦およびインドネシア独立前後の混乱により、主要な外国人長期滞在者はバリを去り[6]、芸術を売り物とする観光地としてのウブドの役割はいったん途絶えた。その後、1950 年代にはホテルやみやげ物店舗もできはじめ、1960 年代初めにはスカルノ大統領がウブドを賓客の招待に活用するようになった。ウブドが広く観光者を迎え入れる体制を整えはじめたのは、1980 年代になってからである。ウブド王宮の成員が中心となって、バリの文化を保存・発展させつつ観光振興をはかることを目的とした観光財団が設立され、オーストラリア人と王宮との共同経営によるホテルが開業し、南部

6 ドイツ人のシュピースは、オランダ植民地政府により敵国人として捕えられ、その送還船が日本軍戦闘機の攻撃によって沈没し、死亡した。オランダ人のボネは、日本軍から釈放されて 1947 年にウブドに戻り、当時のウブド領主（Cokorda Gede Agung Sukawati）やバリ人画家レンパッドらとともに、1956 年に稼働する王宮直営の美術館の立ち上げに関与したが、スカルノ大統領の肖像画を描くことを拒否したこともあり、翌 1957 年にインドネシアを去った。1978 年に病死したボネの遺灰はバリに持ち込まれ、このウブド領主の 1981 年の火葬の際にともに荼毘に付された（坂野 2004: 396-412; Spruit 1997(1995): 40-44, 109-111）。

の海岸リゾートにはない田園風景とバリの芸術文化の魅力を、旅行代理店を通してアピールするようになったのである。その後、外国人と地元のバリ人との共同による宿泊施設や飲食施設などが開業し、ウブドに滞在する観光者と観光諸施設は徐々に増加していった。こうして、ウブドは、王宮の深い関与と小規模な外国人資本の介在を梃子にしつつ、政府主導の上からの開発ではなく、地元の下からの取り組みの集積によって、観光地化を進めたのであった（**写真１・２**）（Lewis & Lewis 2009: 32; MacRae 1997: 25-62, 111, 414-415, 1999: 132, 135-139; Vickers 2011: 462, 466, 472, 477; 吉田 2013a, 2013b）。

ウブドは、田園・ヤシの木・森の風景と舞踊・絵画・彫刻などのバリの芸術や文化、すなわち自然・文化両面を合わせたバリらしさ、つまりは植民地時代に形成された「楽園バリ」のイメージにつながる雰囲気を売り物とする観光地である（**写真３・４**）。ウブドと周辺地域には、宿泊施設・飲食店・みやげ物店などとともに、絵画や彫刻を展示・販売するギャラリーが立ち並び、王宮や寺院ではガムラン音楽・舞踊のショーが毎夜繰り広げられ、芸術文化の観光地としての面目躍如たるところを示している。内陸に位置するウブドは、海岸部より涼しく過ごしやすい。この点で、ハワイ型のリゾートを模倣して開発された海岸部の観光地とは趣が異なるところをもつ。1990 年代前半には、中心部の主要な道路が舗装され拡張され、宿泊施設や飲食店などもいっそう増え、観光地としての利便性も整えられた。ただし、それは、バックパッカーに人気であったウブド市場の安価な屋台が閉鎖され、飲食店での映画上映が寺院や集会場での演劇パフォーマンスに置き換えられるなど、観光ビジネスの強化や徹底と連動する施策でもあった（MacRae 2015: 69, 72-73）。また、90 年代後半からは、小規模な体験型観光やエコツーリズムの拠点という性格も強め、芸術文化や景観の鑑賞よりもむしろ、エコツアーや自然体験、内陸部でのリラクセーションを一義的な目的とする観光者が増加していった。ただし、このバリにおけるエコツーリズムやそれに準じる自然体験型観光の興隆は、バリ島の周縁地域にまで観光開発が虫食い状におよぶ、乱開発をともなうものでもあった。ウブドでは、このころから、斬新なデザインや自然素材の現代的あるいはポストモダン的な商品などを提供する新たな店舗も増えた。グローバルな観光インフラの導入がローカルな文化や自然と融合した、グローカルな観光地として市場の中にポジションを獲得してきたウブドは、かつての楽園のイメージをなおとどめつつも、世界のどこにでもある――ボードリヤールのいうシミュラークルの集積体としての、あるいはリッツアの

写真３　日曜日の踊りの練習風景

写真４　火葬を見る外国人観光客

いう「何ものでもないもののグろーバル化」（grobalization of nothing）としての――楽園観光地への転換を果たしつつある（Baudrillard 1984(1981), 1995(1970); MacRae 1999; Ritzer 2005(2004); 吉田 2011a, 2011b, 2013a, 2013b, 2016a）。

現在、ウブド中心部では田園や森林の景観はもはや失われており、これに重きをおく観光者はウブド周辺地域の村々に滞在するようになっている。インドネシア政府が地方分権化・規制緩和を進めた 1990 年代以降、周辺地域には広大な土地を確保した大型の観光施設がいくつも建設された。その一方で、ウブド中心部には国内外の大型資本はほとんど入っていない。その最大の理由は、所有者が土地を売らず、自身の経営か賃貸による利益の獲得を好むことにある。その賃貸料は、インドネシア通貨危機（1997 年）、バリ島クタでのテロ事件（2002 年、2005 年）、リーマンショック（2008 年）といった危機を経る中でもほぼつねに上昇をつづけ、場所そして契約者にもよるが、数年で倍となる程度の上げ幅を繰り返している。2016 年時点で、中心部の店舗の賃貸料は、モンキーフォレスト通りで年 2 億ルピア（約 180 万円）、ウブド大通りで年 2 億 7000 万ルピア（約 220 万円）が相場とも聞いた。ただ、そうした店舗のある場所のおおくは、住民たちの屋敷地の道路に面した一角や、比較的ちいさな田畑や空き地であったところである。南部のクタやサヌールでは、海岸部など集落の外に観光エリアが展開していった経緯もあり、その種のこま切れに近い土地が法外といってよい高値で転売され、まとまった塊となって大型の観光施設が建設されるという事態が進行したが、ウブド中心部でそれに比肩するビッグビジネスが生まれる見通しはさしあたりないといってよい。このように、土地所有者の一貫して堅実なビジネス――その背景には、集落内の土地を自由に売買できない慣習法がある――は、小中規模の店舗経営者を相手に利ざやを稼ぐというスタイルとならざるをえず、これが結果的に観光地ウブドを大型の外部資本の進出から守ってきたのである。だが、それゆえ、ウブドは、南部のヌサドゥア・サヌール・クタのような、大口の団体客を滞在させ大量に消費させる観光地へと変貌することができず、個人旅行者が中心の中規模の観光地にとどまっている。それら海岸部の主要観光地に宿泊するパックツアー客は、日帰りでウブドに来る程度であり、ウブドでの消費に貢献する余地はかぎられる。ただ、現地資本中心の中規模観光地であるがゆえに、得られた利益がある程度現地の経済システムの中に還流し、さほど外部に吸い上げられない状況を保っている。

この収益をもっとも効率的に得てきたのは、いうまでもなく土地所有者である。彼らが強気に土地契約料を上げているため、土地所有者やその家族・親族が半ば道楽で経営するような店舗をのぞけば、賃貸で成り立つ各店舗は相当な収益をコンスタントに上げなければならない。加えて物価の上昇もある。ただ、ウブドの場合、その店舗の経営規模は総じてちいさなものである。それゆえ、ここに一定の資本をもった在地外の、国内外の個人事業者が入り込む余地がある。とくに、外国人事業者の大半は、もとは観光者としてウブドを訪れ、その居心地のよさ――海岸部のような大規模開発や喧噪がなく、落ち着いた雰囲気を残している――ゆえに、そこに生活の拠点を求めた人々である。ホスト化した元ゲストである彼らは、海外から来る観光者つまり購買者のニーズやトレンドを、バリ人よりもよく知る立場にある。この文化資本と、手落ちの外貨や貯蓄という経済資本、そしてバリ人（インドネシア人）パートナーという社会関係資本――このパートナーによってビジネス参入を教唆されることもおおい――を組み合わせ、現地の安価な労働力および生産・流通システムを最大限

活用しうるブリコルールとなれば、観光ビジネスに勝機を見出すことは可能である。店舗の立地や業種にもよるが、2000 年代はじめまでなら 100 万円ほど、場合によっては数十万円ほどの原資でも、ビジネスをはじめることは可能であった。中には、ウブド中心部にある 1 坪ほどのちいさな雑貨店を年 3 万円、5 年分一括支払いで契約し、改装に 7 万円ほどをかけて開業した日本人もいた。これは例外的に廉価なケースといえるが、こうした小規模な外国人起業家の観光ビジネスへの参入は、バリ外のインドネシア人資本の参入とも相まって、ウブドの観光市場のさらなる活性化を促進するとともに、小中規模の経営中心という構造を固定化することにもなった。ただし、そうした外国人起業家が、つねに優位な立場にあるとはいえない。むしろ、彼らは、土地・建物の所有者との関係では、後者から搾取される弱い立場の人間であることもある。

以上をまとめよう。植民地時代からの芸術の拠点であったウブドは、島の中部にある観光地のセンターであり、90 年代以降は、田園や森林の風景の中のリラクセーションやエコツアーなどの体験観光への需要を満たす観光地という性格を強めてきた。その中心部は、いまも大型の外部資本が入りにくく、小中規模の店舗がひしめき合うという構造的特徴をもっている。右肩上がりで高騰する土地契約料は、ウブドの店舗に淘汰を促している。事実、数年を待たずに閉店したり移転したりする店舗は数おおい。そして、コマ切れに近い土地を高い賃貸料で貸すという中心部の構造が、観光地ウブドを中規模レベルの市場にとどめおくとともに、観光ビジネスに必要な諸資本をもつ外国人起業家の小規模ビジネスが浸透する素地をなしてきた。

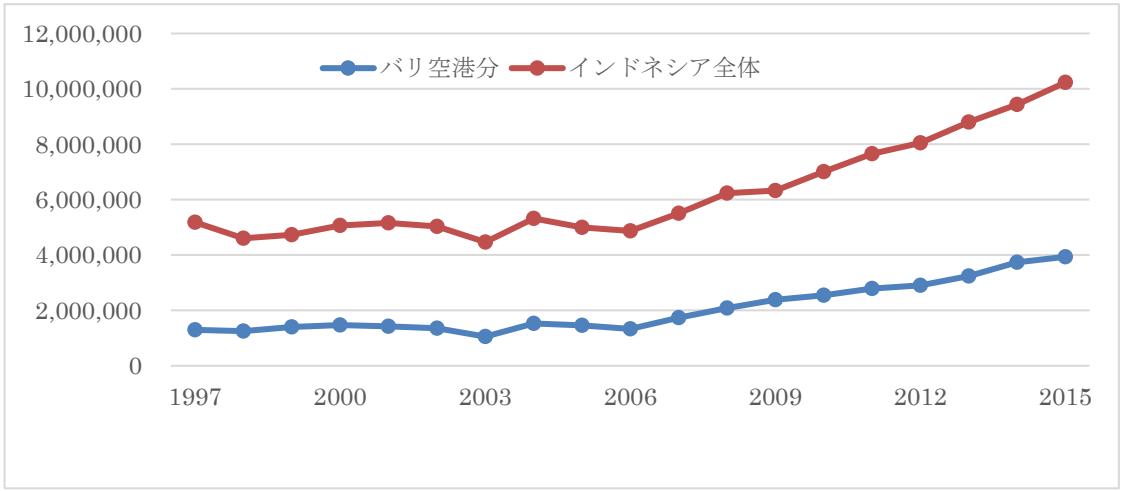
＊

次に、1990 年代末以降のバリ観光について、とくにリスクの顕在化という観点から、振り返っておくことにする。

1960 年代後半から 30 年以上つづくスハルト体制の下、バリでは、持続的な経済成長を背景にした資本の投下と観光開発が継続的に進んだ。そこに、冷水を浴びせる出来事が起きた。1997 年のインドネシア通貨危機である。ルピアの 1/5 近い急落と 3 倍近い物価の上昇が人々とくに給与所得者の生活を直撃し、ジャカルタでの暴動が映像となって世界に流れたことで、外国人観光者はバリやインドネシアへの訪問を一時的に控えた。しかし、バリではほとんど騒ぎがなく、その後の民主化へと向かう流れとルピア安の魅力もあって、バリ観光はすぐに回復した。また、暴動の矛先となったジャカルタの華人系インドネシア人が比較的安全なバリに目を向けたことにより、彼らのバリへの投機傾向はむしろ加速した。さらに、ルピア安は観光に次ぐバリ経済の柱であった織物産業の淘汰をもたらし、結果的にバリ社会は観光依存体質をいっそう強めることとなった。バリ島の西隣のジャワ島中東部はバリに滞在する観光者が消費する食材や土産物の供給地となり、東隣のロンボックを含めバリ島周辺地域からの移民も増加した。20 世紀末の時点で、観光産業に直接従事する者はバリ人の 4 割、運送や土産物産業など間接的な従事者も含めれば 7 割、また観光がバリ人の総収入に占める割合は 5～6 割、バリの域内 GDP に占める割合は 3 分の 2 となり、21 世紀はじめのバリ人家族の 8 割が観光から収入を得ていたとされる。ターブリーが指摘するように、バリ人が経済における急速な観光セクターの拡大と他セクターとくに農業の縮小にたいするリスク認識を欠いていたわけではない。ただ、もはやバリ経済の観光依存体質は後戻りできないところに来ていた。そこに、2001 年 9 月のアメリカ同時多発テロ後の世界的な

観光不振と、2002 年 10 月のクタでの爆弾テロ事件後のバリ観光の不振が到来したのであった（Couteau 2015; Hitchcock & Putra 2007: 171; Howe 2014; Interim Consulative Group on Indonesia 2002; LaMashi 2003; Picard 2009: 102; Ramstedt 2009: 333-335; Schulte Nordholt 2007: 8; Tarplee 2008: 158）。

200 人をこえる死者と数百人の傷者を出したクタでのテロ事件は、観光に依存したバリ経済に深刻な打撃を与えた。テロの直後、いったんバリの観光地から外国人観光者はほとんど姿を消し、ホテルの客室もがら空きとなった。半年から 1 年のタイムスパンでみれば観光者は半減程度であったが、バリ人の実感としては「7 割減」「9 割減」という印象であった。観光関連の諸企業や店舗は軒並み厳しい経営を迫られ、倒産や閉店に追い込まれるところもおおく出た。解雇や賃金カットが続出し、閉店時間が早まるなど、業務縮小はつづいた。ヌサドゥア・サヌール・クタといった南部の観光地では、テロ後半年をこえるあたりからパックツアー客が戻りはじめたが、中小規模の起業家が中心のウブド・チャンディダサ・ロヴィナの観光回復はさらに遅れ、皮肉にも、爆弾テロ事件のあったクタ以上に深刻な状況がつづいた。さらに、これに追い打ちをかけるように、2003 年のイラク戦争と SARS（重症急性呼吸器症候群）、2004 年の鳥インフルエンザとインド洋大津波、2005 年の 2 度目の南部バリでの連続爆弾テロ事件、2006 年の中部ジャワ大地震、2007 年のガルーダ国内便の墜落事故などが重なった。1997 年のインドネシア通貨危機以降の約 10 年間、バリ観光は、回復してはダメージを受ける、客が回復してはまた減るという事態を繰り返した[7]（Byczek 2010: 57; Hitchcock & Putra 2007: 146-149, 160-161; Interim Consulative Group on Indonesia 2002; MacRae 2015: 75; Putra & Hitchcock 2009; Ramstedt 2009: 334-335; Tarplee 2008;



図表 1　バリ空港およびインドネシア全体の入国外国人観光者数
[https://www.bps.go.id/linkTabelStatis/view/id/1387] より作成

[7] 雇用や収入の不安定化という問題に加え、バリ人にとって重大だったのは、インドネシアで「神の島」（Pulau Dewata）という別名をもつバリにおいて、こうした悲劇が起きたことである。バリ人は、神がこの島を守っているという点に相当な自信と自負をもっていた。それは、いくら忙しくても神にたいする儀礼活動をおろそかにしない彼らの宗教実践が保証しているはずのものでもあった。この神義論的前提が崩れたのであった（Hitchcock & Putra 2007: 145; Lewis & Lewis 2009: 205-209; 吉田 2009, 2013b）。

国	2000年	2005年	2010年	2015年
日本	710,769 (14%)	511,007 (10%)	416,151 (6%)	528,606 (5%)
中国	16,266 (0.3%)	128,681 (2.5%)	511,188 (7%)	1,249,091 (12%)
総計（人）	5,064,217	5,002,101	7,002,944	10,230,775

図表２　2000～2015 年　在住国別インドネシア訪問外国人数（日本・中国・総計）
[https://www.bps.go.id/linkTabelStatis/view/id/1394] より作成

Warren 2007: 196; 吉田 2009, 2011a, 2013b)。

この不安定な 10 年は、1990 年代の観光発展期に右肩上がりの将来を予期して移住や起業をしたバリ在住日本人に、経済的にも精神的にも相当な打撃を与えた。この種の事件に敏感な日本人観光者が激減したことで、日本人観光者を主要な顧客に想定していた店やビジネスをたたんだり、バリでの生活をあきらめて帰国したりと、人生設計の再考にいたる日本人経営者もいた（吉田 2004, 2013b)。その後、バリ観光は回復基調に向かった（**図表１**）。ただし、そうした傾向と裏腹なのが、日本人観光者の動向である。2002 年のテロ事件後、日本人観光者の来訪回復は遅れ、その後もしばらくバリを訪れる日本人は減少傾向がつづいた。**図表２**は、日本と中国からのインドネシア入域者数の推移を 5 年ごとに示した表である。その半数弱程度がバリへの直接入域者数であり、括弧内の割合はバリに来訪する観光者の割合を反映していると考えてよい。2010 年代半ばには、日本人のバリ入域者数はふたたび微増に転じたが（https://bali.bps.go.id/statictable/2018/02/09/27/jumlah-wisatawan-mancanegara-yang-datang-langsung-ke-bali-menurut-kebangsaan-2013-2016.html)、中国人観光者の伸長もあって、日本人が全体に占める割合は低下傾向がつづいている。とくに、ウブドにおいては、2010 年代に入って日本人観光者をあまり見かけなくなっている。すくなくともウブドに在住し観光業に携わるバリ人そして日本人たちは、日本人観光者は 90 年代にはおおかったが、2010 年代には目に見えて減っている、と認識している。バリの特定観光地を訪れる観光者数を示す公式のデータは存在しないが、私の観察やバリ人・日本人在住者の認識にもとづくかぎり、今日のバリ入国日本人観光者の増加分の大半は、クタやヌサドゥアなど大資本に支えられた南部の観光地がもっぱら吸引していると考えられる。

このように、観光地ウブドは伸長をつづける一方で、こと日本人観光者を主要な顧客に想定した観光ビジネスは、今後ウブドでは立ち行かなくなることを想定しなければならなくなっている。その淘汰はすでに相当進んでいるといってよい。2010 年代におけるバリおよびウブドの活況は、欧米系そして中国・台湾系の海外からの観光者、そしてジャカルタなどの国内観光者の伸びによって支えられている。日本で少子化が進む点に鑑みても、ウブドの店舗ビジネスが今後日本人を主要な顧客として設定する戦略をとることは、もはやありえないであろう。

論点をまとめよう。2002 年のテロ事件は、バリ人に観光の危機やリスクを意識させるものとなった。その危機感は、2010 年代に入っていったん収束したようにみえる。むろん、それは、危機が去って安全な状況がふたたび到来したということでは決してない。今後もテロ事件が起きる可能性はある。さらに、ここにきて新たな不安定要因もある。2017 年には

アグン山の噴火により、一時的にバリの空港が閉鎖されたり東部地域の住民らが避難したりした。2018 年には東隣のロンボック島で大地震があり、バリでも家屋が倒壊し死者が出た。過去にバリでも大地震はあり、アグン山の噴火も含め、これらは今後のリスクの火種となる。災害や惨事ばかりではない。現状のバリは、世界各地に点在する楽園観光地との差別化の困難な、同質のシミュラークルに満ちた楽園観光地化への転換が、乱開発と環境破壊をともなって進行するただなかにあり、それは観光地バリのもつ楽園としてのポテンシャリティの一部を確実に掘り崩していく過程をともなっている。端的にいって、バリの社会も観光も高いリスクを抱えている。そして、バリ人もそのことを大なり小なり認識している（永渕 1994; 吉田 2009, 2011b, 2013b）。

バリ人人類学者のプトラは、バリ人が現代をカオスの時代（kali yuga）であるとみなしている、と指摘する（Putra 2011: 135）。ベックは、世界リスク社会としての現代社会の主要な危機（リスクの顕在化）として、金融危機、テロの危機、生態学的な危機の 3 つを挙げ、別の論考では、世界リスク社会の基盤を気候変動、金融リスク、放射線に見て取った（Beck 1998(1986), 2003(2002), 2017(2016): 92）。21 世紀のバリでは、これに観光のリスクの高まりなども加算する必要がある。バリ社会に生きる人々は、これら多重のリスクが相まった世界リスク社会に巻き込まれているといってよい。

そして、そうした観光地としてのリスクを強く感じている人々の代表として、現在ウブドで観光者を主要な顧客とするビジネスを営む人々が挙げられる。ウブドでは、バリ人店舗であれ、日本人ら外国人所有の店舗であれ、2010 年代に入ってからは、経営姿勢の緩い店舗ビジネスは撤退または縮小していき、規律や経営姿勢の明確な店舗が存続または伸長する状況が、明確になっている。いわば勝者と敗者が際立つようになってきているのであり、日本人在住者のビジネスもそうした競合関係にさらされている。

では、以上の概観や現状認識を踏まえて、次節ではウブドの日本人移住者について記述することにしよう。

４．それぞれのホームのかたち

バリの観光開発が全島的な規模で進む 1990 年代には、雇用の機会をバリに求めるインドネシア人移住者の増加とともに、バリに移住または長期滞在する外国人も増加した。注目されるのは、この 90 年代に、欧米人を凌ぐ勢いで日本人の長期滞在者が増加したことである。堅調な日本経済、円高、ルピア安、日本人の海外旅行の定着、日本におけるアジア人気、メディアを通した「楽園バリ」のイメージの流通、バブル崩壊後の自分探しの旅の流行、などの複合的な契機が相まって、日本人をバリでの長期滞在へといざなったと考えられる。

とくに、ウブドは、青い海やサンゴ礁といった楽園観光地を彩る定番の要素はないものの、観光者がイメージする楽園らしさやバリらしさ――椰子の木、田園風景、芸術、宗教文化、素朴な人々――を保持する観光地であり、日本における合理化されているがストレスの溜まる生活を中断または放棄し、自身が見出した地上の楽園でのんびり暮らすことを選択した人々が、ここに集まるようになった。そして、彼らの一部は観光者を相手にしたビジネスをはじめた。ただし、それは、営利追求を目的としたものというよりも、必要十分な生活の糧を効率的に得るための手段という性格が濃厚なものであった。もちろん、営利の追求に意

欲的な人々もいたが、彼ら 90 年代にウブドでの暮らしを選び取った人々のおおくは、あくなき利益の追求には否定的・懐疑的であり、儲けはほどほどでよい、場合によっては儲けなくてもよい、という考え方をもっていた。

これを、拙論では「反ビジネス的志向」の生き方と呼んだ（吉田 2005, 2013b: 272-274）。彼らのビジネスは、総じてこの反ビジネス的志向とセットになっていた。あるいは、経済的な生産性とはかならずしも折り合わない、価値実現という精神的な意味での生産性こそ、彼らの生とビジネスの根底にあるものであった。日本における経済の低迷と雇用の流動化、インドネシアのリタイアビザ制度の創設（1999 年）などが 2000 年代に入って年配者の移住を後押しし、2013 年の東日本大震災後には（東北ではなく）首都圏の比較的富裕な人々がバリそしてウブドにも逃れてきた。現在、ウブドとその周辺には数百人規模の日本人が在住していると推定される。中には、十分な資金や年金をもとに悠々自適の生活を送る年配者の夫婦やシングルもいるが、生活資金の一部または全体をバリでの収入に依存する者もいる。推計では、ウブドの日本人在住者の 3 割ほどが観光関連ビジネスを営んでいると考えられる（今野 2016: 84; MacRae 2015: 76; 吉田 2013b: 30; 吉原 2016c; 吉原・松本 2016）。

私は、拙論で、2000 年代を中心としたウブドの日本人観光ビジネスの特徴について論じた（吉田 2005, 2013b: 231-277）。その議論のポイントは 3 つあった。第 1 は、いま述べたように、ウブドにおける一定数の日本人のビジネスが、営利追求を二義的とみなす彼らの反ビジネス的志向の生き方と不即不離であるという点である。第 2 は、こうした彼らのビジネスが、小中規模のビジネスの集積体である観光地ウブドの経済市場の構造と対応し、この構造に支えられている――また、観光地ウブドも外国人の小規模起業家抜きには成り立たなくなっている――という点である。それもすでに触れた。そして第 3 は、こうした観光地ウブドの構造と、営利追求に否定的・懐疑的な彼らの生き方との共振関係は、いわば危うい均衡の上に成り立つものであって、近い将来において変質していかざるをえない可能性が高い、という点である。いい換えれば、観光地ウブドの特性も、ここに居場所を見出した日本人のビジネスとそのライフスタイルも、高いリスクを抱えたものだということである。以下では、この第 3 点について確認することをひとつのポイントとしつつ、一部は拙論の記述を圧縮し、また一部は民族誌的事実を補足しながら、25 年にわたる断続的な参与観察とインタビューデータを整理し、数人に絞ってウブドの日本人の暮らしぶりの一端を記述していくことにしたい。なお、以下に登場する日本人のアルファベット名は、拙論（吉田 2005, 2013b）における記述と対応させている。

＊

A 氏（2016 年現在 78 才、独身、男性）は、ウブドにおける最初の日本人店舗所有者であるとともに、最初期の日本人移住者でもある。現在、ウブドを生活の拠点とし、1 年の大半をバリで暮らしている。自ら「『暮らしの手帳』の愛読者だった」というように、身の回りのことは自身でこなし、比較的質素な生活を送ってきた。

A 氏の最初のバリ来訪は 1978 年であった。そのきっかけは、1970 年のヨーロッパ旅行の帰りにナホトカから乗った船でドイツ人と知り合ったことであった。彼を自宅に泊めたことが縁となり、その数年後にA氏はミュンヘンにあるこのドイツ人の家に遊びにいった。そのとき、壁にかかった仮面をみせてもらい、音楽を聴かされた。A氏が彼に尋ねると、お前は日本人なのに知らないのか、といわれたという。それがバリの仮面であり、ガムラン音

楽であった。A氏は「私はドイツを通してバリを知った」と述べる。

この 1978 年のバリ旅行の際、A氏は、当初クタやデンパサールに滞在したが、「そのときには最後の楽園バリという印象はなかった」。しかし、ガイドの勧めもあってその出身地であるウブドに来たときに、「ここに私の思うバリ、楽園バリがある」と実感したという。そのころウブドにはアスファルトの道路もレストランもなかった。4 軒ある宿はいずれも 3 食付きであった。本格的な観光地化の前段階であったウブドを気に入ったA氏は、その後もたびたびこの地を訪れ、1982 年にこのガイドの住む集落に滞在拠点となる家を建てた。当時のA氏は日本を生活拠点としていたので、A氏がいないときには人に貸そうということになり、これをホテルとして届け出て、A氏は中期滞在のためのビジネスビザを取得した。

1990 年ころに 1 年の半分をバリで暮らすようになったA氏は、この年に別のホテルをウブド郊外に建て、移り住んだ。その建設費用は自身の宿泊費の代わりとみなし、いずれのホテルも滞在期間の終了後にバリ人に譲渡した。この 30 年余りのウブドでの悠々自適の暮らしの中で、A氏は、自身の恩師に当たる人物をバリに迎えて看取ることもした。やはりバリを愛したこの恩師の葬儀は、遺言にしたがって、バリのヒンドゥー式に執り行った。京都生まれのこの恩師が「大文字が見たい」といい遺していたので、毎年 8 月下旬に竹を大の字に組んで燃やす「大文字焼き」を行って、恩師を偲んだ。

A氏は、2014 年にウブド郊外に建てた新居に移り、その 2 階をアートスペースとし、ここに 30 年以上にわたって開催してきたウブド郡の子どもの「絵画コンテスト」（Lomba Melukis）の優秀作品を展示した。おなじく約 30 年間つづけ、2010 年代前半に終了した「凧揚げコンテスト」（Lomba Layan-layan）とあわせ、A氏はこれら 2 つの子ども向けイベントを、ウブド郡の教育委員会関係者の協力を得て毎年自費で運営してきた。こうした地域社会への貢献もあって、A氏はウブド王宮からバリ人名を贈られている。

以上のように、A氏はウブドで起業した最初の日本人長期滞在者であったが、A氏のホテル運営は、その実態に即していえば、利潤の獲得を目的としたビジネスとはいえない性格のものであった。経済的に余裕のあるA氏にとって、ホテルの建設は、生活の糧を稼ぐための手段ではなく、居場所の獲得、そしてそれに尽力してくれるバリ人の収入確保のための手段だったのである。ともあれ、A氏は、前節で触れたようなバリそしてウブドの観光の浮き沈みにほとんど影響されることなく、30 年ほど一貫して「楽園」と感じたバリのウブドをホームとする安定した生活をつづけてきた。そして、現在住む新居を終の棲家として、恩師のようにバリで荼毘に付される計画をもっているのであろうと推測される。

＊

次に、1991 年に日本食レストランを開業させたB氏（2018 年現在 55 才、既婚、女性）について記述する。このレストランは、C氏（2018 年現在 71 才、独身、男性）との共同経営でスタートした。なお、ウブドで 1990 年代初頭までに開業したいわば第 1 世代の日本人店舗の中で、現在までつづいているのはこのレストランのみであり、他はすでに閉店したりバリ人所有の店舗となったりしている。

B氏は、OL であった 1987 年に短期の旅行ではじめてバリを訪れた。その後ふたたびバリを訪れ、バリとくにウブドの文化や自然の全体に魅かれた。1990 年には日本での仕事をやめ、ウブドに半年間滞在するつもりでバリに来た。当時、バックパッカーに相当する旅行者や長期滞在者は、ウブドの公設市場にある現地人向けの屋台で食事をする傾向があった。

Ｂ氏とＣ氏はここで知り合った。店舗デザイナーであったＣ氏は、日本での生活をいったん切断し、外国で生活することを決意して 1990 年に日本をあとにしていた。当初はバリの東のロンボック方面に向かうことを考えていたが、そこに行く手前のバリで、ウブドに滞在するうちに、ウブドで暮らすことを考えるようになった。そしてＢ氏の料理の腕前を見込んだＣ氏が、それまでウブドになかった日本食レストランの共同経営を提案した。こうして、Ｂ氏とＣ氏は店舗開業の準備に踏み切り、ビジネスビザを取得して長期の滞在をはじめた。

白壁と黒く高い屋根、開放感のある客席からなる彼らのレストランは、当時のウブドにある店舗の中でも特色あるデザインの建物であった。Ｂ氏が提供する家庭的な日本食と、Ｃ氏のよろず相談役を兼ねた接客とが有機的に機能し、このレストランは、1990 年代後半になって日本人経営のレストランが複数できて客が分散するまで、日本人の長期滞在者や個人旅行者のたまり場として機能した。また、日本人以外の外国人観光者や日本びいきのバリ人芸術家にも一定の人気を獲得した。旅行会社からは、日帰りで周遊する日本人ツアー団体客の昼食場所にしたいという申し出が何度かあったが、ふたりはこれを断わっていた。「儲かるだろうが、店の雰囲気が悪くなるから」（Ｃ氏）というのである。両者とも、ウブドとその周辺の文化や宗教に深い関心と共感をもち、旅行者にバリに関するあれこれの情報を伝え、ときには儀礼や寺院祭礼があると車やバイクで案内もした。

このレストランは、最初の土地契約から 10 年後の契約更新――当時は 10 年契約が普通であったが、現在では外国人との店舗や土地の契約は 2～3 年が主流となっている――を控えていた 1998 年に、バリ人男性と結婚していたＢ氏（結婚後インドネシア国籍を取得）が単独で所有することになり、共同経営者だったＣ氏は撤退した。それまで利益は 2 人で折半していたが、諸物価の高騰と従業員の給料のスライド上昇もあって、純益の伸びが鈍くなってきたこと、Ｃ氏が単独ではじめていた別の店舗ビジネス（後述）が軌道に乗りつつあったことが、その背景にあった。その後、2002 年 10 月のバリ島クタでの爆弾テロ事件によって、このレストランの売り上げはおおきく落ち込んだ。年末年始の繁忙期に観光者がほとんど来ず、赤字がつづき、Ｃ氏の助言もあってＢ氏は従業員の解雇や減給に踏み切り、半年以上つづいたこの厳しい時期をしのいだ。

2004 年、Ｂ氏はふたたび土地契約更新の交渉に入った。しかし、地主側と折り合わず、Ｂ氏は、道路からより奥に入った隣接する別の土地の契約を別の地主と結んで、あらたな建物を建ててレストランをつづけた。Ｂ氏は、この新規開店に前後してもうひとつのビジネスをはじめた。バリ料理を教えるショートレッスンである。バリの食材に関心のあったＢ氏は、夫の家族と生活する中でバリ語やバリの生活習慣に習熟し、すでに若いバリ人女性がつくらなくなった調味料を自らつくるなど、さらに料理の知識と技能に磨きをかけていた。この新規のビジネスは、そうした経験の蓄積を生かしたものであった。リピーターとなる客はおおくないので、このビジネスはかならずしも安定したものではない。しかし、Ｂ氏の友人によれば、当時のＢ氏にとってこの新たな取り組みは新鮮味のなくなっていたレストラン経営に代わる生きがいとなった。Ｂ氏は、どんぶり屋など新規の小規模店舗を企画したこともある。また、日本人を顧客とした結婚式の仕事を手伝ったこともある。その後、土地の契約更新が折り合わず、Ｂ氏は 2013 年により郊外の集落に再度レストランを移転させる決断をした。そこでも、このショートレッスンはつづけている。

この 2 度目の移転に際しては、Ｂ氏の心の中に相当な逡巡があった。20 年以上つづくこ

のレストランを閉めて、夫と暮らすウブドから 10 キロメートルほど離れた村で、弁当屋をはじめることも検討した。この村は、州都デンパサールに近く、主要な観光地を結ぶ街道沿いにある。現地人が買って食べる通常の弁当よりは割高であっても、地元の素材をつかった日本食的なおかずを入れた新しいタイプの弁当を売れば、比較的裕福な現地の人々に加え日本人観光者にも売れるのではないか、と考えたのである。しかし、B 氏のイメージにかなう適切な場所を見つけられず、結果的にこの弁当屋の企画は見送り、ウブドにあるレストランを土地契約料の安価な場所に移転させ継続することにした。

そのころ、バリ暦の正月に当たるガルンガン（Galungan）がめぐってきた。B 氏は、この節目の日の前に、スタッフ全員を集めたミーティングを行った。B 氏によれば、スタッフは閉店の可能性を相当心配していたが、移転し店をつづけることにしたと述べると、みなが安心したようだったという。このミーティングの際、あるスタッフが代表して次のように述べた。このレストランのおかげで、われわれ従業員と、その妻や夫――ひとりを除いてみな既婚者である――、子どもたち、合わせると 60 人以上があなたとこの店のお世話になっている、と。B 氏は「このときあらためて自分の責任を自覚した」と述べる。B 氏は、レストラン経営に若干意欲を失っていた時期、「5 年ぶりに来ました、10 年ぶりに来ました、といった客の声に励まされて」店をつづける気持ちを新たにした経緯がある。この 2013 年のガルンガンのときは、長年働いてきたスタッフ――半数近くが勤続 20 年前後である――の声に励まされて、60 歳くらいまでは店をつづけていこうという思いを新たにした。

2 度の移転の際にはいずれも、レストランは閉店したという噂が立ち、開店直後の客足はかならずしも順風ではなかった。とくに郊外の村への 2 度目の移転の際には、客足が戻ってきてくれるか、B 氏や友人たちはかなり心配していた。しかし、リピーター固定客の絶大な支持と、折からの日本食ブームの中での外国人観光者からの需要もあって、シーズンのオンオフはあるものの、移転後もレストランは安定した経営状況を保っている。ただし、物価高騰から純益は次第に減少し、テロ事件に翻弄されたり、土地契約を渋る地主との折衝という困難に直面したりもしてきた。

B 氏の夫は舞踏家であり、一族の本家筋の長男である。父系社会のバリでは、社会組織や宗教における長男の役割は重い（cf. Geertz 1959; Geertz & Geertz 1975(1989); Howe 2001）。夫は、父の後を継ぎ、村における重要な儀礼舞踊の踊り手をつとめる。とともに、ガムラン音楽・舞踊のチームの一員として海外公演にもしばしば出かける。B 氏がこのチームを応援していた縁から、ふたりは結ばれた。

B 氏は、夫の家族とともに住む住居と店舗とを毎日車で 30 分ほどかけて通う。夕方に店に入り、夜の営業時間中はずっと厨房で調理作業をし、接客は短い時間のみである。従業員を帰らせた閉店後も仕込みをすることがおおく、帰宅は通常夜中 12 時を過ぎ、ときには夜 1 時や 2 時となることもある。結婚当初は、夫の家族・親族への手前もあって、早朝に起きて朝食をつくり、100 個ほどの供物（チャナン）をつくって供える仕事を毎日した。睡眠不足は、しばし午睡を取ることで補った。しかし、これでは生活のリズムや体調を整えることは難しい。途中からは、供物の準備と献納は夫の母に任せたが、それでも、大家族ゆえの気苦労や本家筋ゆえの仕事などはあった。たとえば、ガルンガンの際には早朝 3 時ころから男性たちが共同作業で豚を屠るが、その際男性にコーヒーを出すのは女性の仕事とされており、長男の嫁である B 氏がこれをつとめることもあった。ガルンガンは賑やかな正月であ

り、家族・親族が集まるため、B氏が休める状況にはない。そこで、B氏は、従業員のために休業にした静かなガルンガンの日の店に来て、ゆっくり休むようにした。ガルンガンの日は、普段忙しい店舗がくつろぎのホームになったのである。

B氏は、2004 年のインタビューの際に「屋敷の敷地の奥の方に、自分たちだけが住む別棟を建てることが夢である」と述べていた。B氏にとっては、夫の家族・親族とともに暮らす屋敷ではなく、そこから囲い込まれた夫婦と子どもだけの空間こそが、希求されるホームなのであった。後述するM氏のように、結婚当初からそうした別棟を夫の親に建ててもらう者もいるが、B氏は貯蓄を重ねてこの夢を実現させた。この念願の別棟は、キッチン、ダイニング、リビングのスペースからなり、トイレと、バリ人住宅には通常ないバスタブもつけた。風呂とキッチン・冷蔵庫を大家族から独立させることは、B氏にとって重要なポイントであった。新居完成後の 2010 年のインタビューでは、「いまは昼寝もできる。やりたいことをやり放題みたいな感じである」とうれしそうに語っていた。夫の母が屋敷の家事を引き受けてくれたため、このマイホーム新築後、B氏が夫の両親に提供する生活費は増やしたが「でも、楽になった」という。

以上のように、B氏は、中期のバリ旅行の途中で、バリに滞在し日本食レストランをはじめる決断をし、そのままバリでの生活に入っていった。レストラン経営はつねに順調だったわけではない。テロ事件等による観光者の激減や、土地契約の更新断念による店舗移転など、不安定な時期は何度もあった。また、高騰する土地契約料・食材費[8]・光熱費は、利潤を縮小させる方向に一貫して作用してきた。その中でも、B氏は、他店に比べれば高い給与を従業員に支払い、昇給も行ってきた。B氏が店舗の閉鎖を検討したり、ビジネスにたいする意欲が希薄化したりしたこともあった。しかし、変わらぬ味と店の雰囲気を慕う顧客の声を繰り返し聴き、従業員とその家族への責任を自覚する中で、B氏は、結果的に 25 年以上にわたってレストランをつづけることとなった。B氏のレストラン経営は、利潤の追求という経済合理的観点ばかりでなく、こうした過程の全体に照らして理解されるべきものである。

端的にいって、このレストランは、リピーター観光者や長期滞在者にとってのひとつのホームとして機能してきた。とともに、B氏にとっても、大家族で暮らす夫の実家という、かならずしも安らがないホームのある種の代替として機能してきたといえる。いずれレストランの経営者は引退することになるであろうが、B氏は念願であった別棟というソリッド・ホームを得たのである。

2017 年に、B氏は 15 年ぶり 2 度目の日本への帰国を果たした。ただ、実家の方に泊まったのは 2 泊程度であり、主たる目的は、親との久しぶりの再会よりも、まだ日本に行ったことのない第 2 子に日本を紹介し、温泉などに行ってしばらくゆっくりとすることであった。つまり、この約 1 週間の日本旅行は、束の間の休息を過ごす海外観光なのであった。ただ、機上で空から地上の風景を見ているときには、日本が自分の祖国であるという感慨を覚え、涙が出そうになったという。また、温泉旅行ではあらためて日本の社会や自然のよさを

[8] たとえば、2010 年代前半、日本での小売価格が 1500 円ほどのパック焼酎が、バリの食材店では 6000 円程度で売られていた。高率の関税によるところがおおきいが、諸物価高騰とともに中間マージンが上がったためでもある。小規模経営の日本食店舗はこうした食材店から仕入れるが、これを店での販売価格にそのまま転嫁はできず、焼酎を出しても利益はないに等しい。ほかにも「売れても儲からない」ものはある。

実感し、近いうちにまた日本を訪れたいという思いを強くした。B氏の周囲には、日本に一度行ってリピーターになるバリ人も何人かいるが、自分もそれに近いのかもしれない、という。この日本旅行は、それまで背後に退いていた日本というもうひとつのホームにたいするB氏の意識を喚起する機会となったようである。

＊

次にC氏について述べる。上で触れたように、C氏はB氏と共同で日本食レストランをはじめた。日本に戻る退路を断っていたC氏は、いずれバリで生活資金を得る術を探さねばならなかったが、このころ増えはじめた日本人のリピーター観光者と中長期滞在者が固定客となり、このビジネスは軌道に乗った。

C氏は、1994年から5年間、このレストランの常連客でもあった、短期でウブドにやってくる日本在住のリピーター観光者向けに、年 6 回発行のウブド情報誌を友人の協力を得て発行し、バリから定期的に送るという試みもした。さらに、C氏は、このレストランの開業・経営を通して蓄積した各種の情報やバリ人との人間関係を資本に、1995年に単独で旅行会社をウブドに開いた。この会社は、顧客のほとんどが日本人であるという点を特徴とする。たとえば、この会社のホームページも、英語版やインドネシア語版はなく日本語版のみである。一時期はこの旅行会社の2号店もあったが、これは2年ほどで閉めた。また、C氏は、1998年に自然な素材感を生かした雑貨やインテリアの販売スペースに簡単なカフェを併設した店舗も開いた。その商品の一部はC氏のオリジナルな造形品であり、この店舗はC氏の道楽の要素も漂うものであった。このように、1990年代のC氏は、温めたアイディアを実行に移しビジネスのサイクルがまわっていくという好循環の中にあった。ただし、生活は質素といってよく、昼ごろ起床し、日暮れまでは創作活動に取り組み、夜はレストランで接客をし――日本食レストランの所有者を辞めたあとも、C氏は食事がてら接客役をつとめることがおおかった――、ときに買い付けや各地の儀礼・祭礼・舞踊の見学に行く、というのが当時のC氏の生活パターンであった。2004年には、雑貨店の2号店（こちらは雑貨販売のみ）を開いたが、この店舗は従業員が問題をおこしたため、2年を待たずに閉店した。1号店も商品の売れ行きが芳しくなく、2006年には閉店し、店舗の賃貸権を友人のインドネシア人に譲った。こうして、C氏のビジネスは旅行会社1店舗のみとなった。

この旅行会社は、空港送迎やデイリーツアーなどをおもな商品とし、小規模ながら堅実な観光ビジネスを営んできた。特徴的なのは、大手のツアーオフィスが手掛けることのない、ある地域に固有の宗教文化（音楽、田園風景、寺院祭礼、トランス儀礼、占いなど）をテーマにした不定期ツアーを商品化した点である。バリの諸地域の宗教・文化・芸能に関心を寄せてきたC氏ならでは商品戦略ではあるが、こうしたニッチビジネスは、かならずしもおおきな需要があるわけではなく、また需要があれば別会社が参入してくるため、なかなか有力商品として発展させにくい。「[ある地域の] トランスも、10年つづけて見ると、おなじ人がおなじトランスをつねにやっているとわかる。たとえば、この人の場合は、木になるトランスであるとか。でも、木になるトランスは、じっとしているだけでツーリスト受けしないため、ツアーとしては企画しにくい。ジュゴグ［大きな竹のガムラン］のツアーは、複数のツアーコンダクターがやるようになったので、うちがはじめたのだが、もう手を引いた」（2000年、C氏）。この2000年ころは、ウブドにやってくる日本人が右肩上がりで増加していると感じられる時期であり、店舗の営業も順調であった。C氏は、業務はバリ人スタッ

フに任せ、企画・ホームページ運営・収支や業務の簡単なチェックだけに近い関与の仕方であり、「何もしなくてもお金が入ってくる感じであった」という。しかし、2002 年のバリ島クタでのテロ事件の直後は月 1 万円程度にまで収入が落ち、第 3 節で述べたように、その後のバリ観光は浮き沈みの不安定な状況に入っていった。この旅行会社は、固定客を抱えているものの、新規の顧客を開拓しビジネスの裾野を広げるという経営方針は希薄であった。その背景には、C 氏があくなきビジネスの追求に否定的であり、バリで何とか食べていければよいという考え方をしていたこともあったと考えられる[9]（吉田 2005, 2013b）。結果的に、当初 4 人のスタッフを抱えていたこの旅行会社は、個人的な都合などによって辞めていったスタッフの補充をしないまま、2012 年には 1 名だけが残る体制となった。

C 氏は、2000 年のインタビューの際、「本当はこっちで火葬にしてほしい」と心境を吐露していた。C 氏は、ウブド近郊の集落に住むバリ人男性を身元保証人兼ビジネスパートナーとしていた。B 氏との共同経営のレストランの名義人も彼であり、家族ぐるみの付き合いであった。このレストランの建築も、彼を経由しこの集落の大工に依頼していた。C 氏は、その集落や村の祭礼や儀礼の際にしばしば寄付をし、地域の人々に受け入れてもらうよう努めていた。それは、C 氏がこの集落で荼毘に付してもらうことを望んでいたからでもある。しかし、諸般の事情からウブド周辺の別の集落の間で居住地を転々としたC 氏と、その集落の人々との関係は、やや疎遠になっていった。2000 年当時、C 氏は、この状況では、身元保証人やその集落が自分の火葬を受け入れてくれないのでは、と感じていたのである。「このあとまた、あの集落に移ってずっと住めば、あるいは火葬をやってくれるかもしれないが」と述べた、当時のC 氏の語り口には、若干の諦念が混じっていたと私は感じていた。

しかしながら、その後、状況は変わっていった。身元保証人のバリ人との関係は、親密と疎遠の波を繰り返しながら、遠い関係になっていった。他方、C 氏は、2013 年から上に触れたこの集落の大工の家に間借りすることになった。数年間借りていたアパートが値上げに踏み切ったことがきっかけであった。ただし、いよいよC 氏が「終活」に入ったのかというと、かならずしもそうではなかった。逆に、このころ、C 氏はバリを終の棲家とすることを再考するようになったのである。背景には、自身の旅行会社の業務縮小、今後も予想されるさらなる物価の上昇と日本人観光者の減少への危惧、などがあったと考えられる。きっかけは、中米のある国（c 国とする）に在住の日本人がウブドに観光に来たときに、一度遊びに来てくださいとC 氏を誘ったことであった。その直後からC 氏は計画を具体化していった。2014 年に、24 年間一度も帰っていなかった日本にいったん戻って、しばしばバリを訪れていた子や元妻らに会ったのち、最短で半年間、場合によっては永住も視野に、c 国に行く、というものであった。「来年は 67 歳になる。あまり遅くなるといけないので、行くならそろそろである。3 年くらい向こうにいて、そのあとはバリに帰るか、日本に帰るか」。C

[9] たとえば、この旅行会社のホームページでは、エステやスパの良心的な店舗を紹介している。C 氏によると、高い料金を取るスパの場合、その半分は中間マージンであり、これは客に紹介し案内するツアー会社やガイドの儲けとなる。しかし、C 氏の会社はそうしたマージンを取らず、ただ紹介しているだけである。C 氏は、だからこそホームページを見た客がこの会社を利用してくれると考えるのだが、スタッフの中には、ここで他店のように儲けを得るべきであって、C 氏のつくるホームページはその点で意味がない――つまりビジネスを削いでいる――という意見をもつ者もいた、という。

氏は、ふたたび安住のホームを模索しはじめたのである。

結果的に、c 国では「やりたいことがみつからなかった」ということで、C 氏は半年の滞在で日本に戻り、2014 年秋にウブドの下宿先の大工の家に戻った。消去法によって、C 氏はウブドでの暮らしを再選択したと考えられる。ウブドの旧知の人々は、c 国行きの前後に約 3 か月ずつ日本に滞在し、子らとの絆を再確認したことが、C 氏の今後の人生計画と心理的安定にとって、c 国での経験以上におおきな意味をもったのでは、と推察している。

以上をまとめよう。C 氏は、1990 年に日本を後にし、新たなホームを見出すべくインドネシアにやってきた。当初予定していた目的地に向かう途中に訪れたバリのウブドが、C 氏にとっては居心地のよいホームになった。1990 年代の C 氏は、ウブド周辺のバリ人そして長期滞在日本人らとの間に親密な人間関係を構築するとともに、ウブドではじめての日本食レストラン、増加する日本人観光者をターゲットにした観光ニッチビジネスの開拓、自身の趣味にもつながる雑貨の販売など、アイディアを生かした観光関連ビジネスを次々と展開していった。しかし、2000 年代に入るとウブドでの観光ビジネスはかならずしも右肩上がりではないことが明確になり、2010 年代になると日本人観光者の伸びも頭打ちになった。C 氏は、ここで、いったん終の棲家と考えていたバリを離れて新天地を求めてみることにしたが、翌年にはふたたびウブドに戻ることになった。1990 年代には安住の地であった観光地ウブドは、2010 年代にはかならずしも確固としたホームではなくなった。

ただ、その中でも、C 氏がウブドに長期滞在する日本人のネットワークの中心につねにいたことに変わりはなかった。C 氏は、意識して、人と人とをつなぐ結節点として振る舞いながら、短期の観光客から長期滞在者までさまざまな人々に、ビジネスから恋愛・結婚にいたるよろず相談役となって、助言を与え支えてきた。この点で、C 氏自身が、日本人長期滞在者やリピーター観光者にとってのホームたるポジションを占めてきたといってよい。C 氏をよく知るある日本人長期滞在者（2014 年インタビュー当時、64 歳、男性）は、C 氏のオーガナイザーとしての力量を高く評価する。「C 氏は、出会った若いさまざまなバリ人のもっている才能や性格を見極め、これをうまくつないで、イベントやビジネスにつなげていった。その一方で、ウブドの王族など、バリ人有力者をつかってビジネスをするという安易な方法を採らなかった。C 氏は、バリ人といっしょに仕事をすることで、バリ人を育てた。C 氏のやり方を横で見ていて育ったバリ人がいると思う。ただ、彼の旅行会社にそれが引き継がれているとは思えない。彼の後継者といえる人もいない［のが残念である］」。

＊

次は J 氏（2018 年現在 50 才、既婚、男性）である。J 氏は 1993 年に日本からバリに来た。南部バリでしばらく過ごした後にウブドに移り住み、ウブド在住のバリ人をビジネスパートナーとして、1997 年にカフェを開いた[10]。その後、交際していたバリ人女性と結婚した。J 氏の妻は、のちに店長としてカフェを切り盛りするようになる。

ふたりが結婚の決意を固めたのは、ちょうど J 氏の両親がバリに来ていた最中であった。はじめてバリを訪れた両親を迎えたときには、交際していたこの女性を、店のスタッフとして紹介した。まだ結婚の意志をしっかりと固めるまでにいたっていなかったからである。しかし、両親が日本に帰る前の会食の際には、この女性と結婚したい、と両親に告げた。両親

[10] 拙論（吉田 2005, 2013b）では 1998 年開業とあるが、訂正する。

はびっくりしたが、話が急展開していった事情をあらためて説明し、周囲の友人たちの補足の説明などもあって、理解を得ることができた。J 氏は、その場しのぎで後日に話をまわすことをせず、あえて正直な気持ちを率直に両親に伝えたのであった。後日の結婚式の際には、両親があらためてバリを訪れた。21 歳の若さで外国人男性である J 氏との結婚に踏み切った妻を、J 氏は「肝が座っている」と評価する。ウブド郊外の村に家を構えた J 氏は、村や地域の行事にもできるだけ参加し、バリ人のように生きていこうとする姿勢をもって暮らしている。

J 氏がはじめたカフェは、こぢんまりとした店構えであったが、インテリアから食器そしてメニューまで統一した雰囲気でまとめられ、客がゆっくりとくつろげるような配慮がなされていた。そして、聖水にもつかわれる湧き水をわざわざ山の方から毎日汲んできて、この水で、自分の手で焙煎した輸入物のコーヒー豆をつかい、1 杯ずつていねいにコーヒーを入れていた。こうしたスタイルは現在も変わらない。こうしたこだわりのためもあって、コーヒー1 杯が、開店当初から 200 円強と、観光者向けの安価なレストランでの軽食に近い値段であるが、おいしいコーヒーをゆっくり味わうというタイプの店がそれまでなかったため、店舗は繁盛した。開業当時から日本語の新聞や書籍をおいていたが、店舗賃貸契約の更新を節目に 2009 年に店を移転し、二階建ての開放的な店構えへと衣替えしたときに、書籍のスペースを増やし、DVD を無料で貸し出すなどの付加サービスもはじめた。また、日本人の友人の経営する諸店舗を巻き込んでポイントカード制度を立ち上げ、食事のメニューを更新・強化し、店でインターネット中継のラジオ番組やライブをおこなうなど、次々とアイディアを実行に移し、他店舗および過去の自身の店舗からのさらなる差別化に余念がなかった。J 氏のカフェは、こうした工夫と、長年の友人関係の蓄積もあって、日本人長期滞在者のひとつのたまり場となった。

J 氏の積極果敢な経営姿勢と長時間労働は、2010 年ころまでのウブドの日本人経営者の中では、かなり例外的なものであったといえる。おおくの日本人経営者においては、商品のデザインや中長期的な経営戦略を練るための時間を考慮外とすれば、店舗や従業員の管理・監督、経理、在庫・仕入れのチェックだけに携わるというケースがおおく、平均すれば 1 日の労働時間は 2〜3 時間にも満たない程度であったからである。しかし、こうした経営スタイルの店舗の一部は、2010 年代になると淘汰されはじめた[11]。

仕事熱心な J 氏ではあるが、J 氏の生活がビジネス一辺倒というわけではない。上記のラジオ番組に出演したり、ウブドの日本人会のミーティングや本の交換会の準備や運営にも積極的に関与したりしている。また、店のホームページとは別にブログを立ち上げ、そこで毎日のウブドの風景を動画でアップしたり、ライバル店といってよいウブド周辺の飲食店を積極的・肯定的に紹介したりしている。J 氏は、ウブドに来たくてもなかなか来られない日本のウブド愛好家たちに情報発信することに、喜びを見出しているのである。

2014 年にはウブド中心部にスターバックスが進出し、これに前後して、ウブドでもドリップコーヒーやエスプレッソを簡単につくる機械を導入したカフェが増えた。こうした状

[11] たとえば、拙論（吉田 2005, 2013b）で言及したK氏（2016 年現在 68 歳、男性）は、地主と土地の契約更新料で折り合わず、2012 年に 10 年間所有した店舗を手放すことになった。この店舗は、日本人の新オーナーの明確な経営方針の下、欧米人を中心とした顧客の根強い人気を保ちつづけている。

況の中で、J 氏は一度カフェの閉店を決めかけたこともある。しかし、友人たちの説得もあって翻意し、その後はゆっくりコーヒーを飲むカフェから、食事メニューをより充実させた食べる店への切り替えをはかることにした。納得できる料理を客に提供するため、J 氏が仕込みにかける手間と時間は増えた。たとえば、日本から取り寄せるだしの素材をつかったラーメンスープの作成は、1 日がかりの作業となる。もともとカフェで軽食中心であった店の厨房は、いま提供している日本食メニューすべてを準備するには十分なスペースがなく、主要な仕込みは J 氏が自宅でおこなっている。ただし、そうした日々の作業の試行錯誤こそ、J 氏の楽しみでもある。

J 氏のカフェは、2017 年に 20 周年を迎えた。J 氏は、これを機に店舗の改装を決意し、SNS で次のような発信をした。ウブドを訪れる旅行者や、ここに暮らす在住者のニーズは変わってきており、その変化についていけなくなった店舗は潰れ、代わって新しいコンセプトの店舗が増加している。こうしたウブドの変化に後れを取らないよう、また今後も気軽に食事・喫茶・交流を楽しんでもらえる場所でありつづけるよう、この 20 周年をきっかけに、本気で生まれ変わることにした、と。J 氏は、妻と子とともに、バリのウブドをホームとして生きている。しかし、以前に比べれば、経営環境は厳しさを増している。観光地ウブドの中心部に位置する現店舗は、契約更新すれば借地料がいまの数倍に跳ね上がることが確実である。また、駐車スペースの確保が難しく、周囲の喧騒に包まれるようにもなっている。

それゆえ、J 氏は、店舗の移転を視野に入れている。ひとつ検討しているのは、まだ自然が残る自宅近くの田んぼの真ん中に、開放的な飲食スペースを配した店舗を開業することである。こうした構想をもつにいたった一番の理由は、ごみ問題にたいする危機感であるという。村の人々とプラスチックによる環境汚染などについての認識を共有しつつ、ごみの分別をより徹底するとともに、生ごみは畑の肥料にし、野菜を育て、これを店の食材としてつかう、というリサイクルをおこない、自身の暮らす地域への社会貢献と店舗経営とをつなげようと考えているのである。「畑に肥料をまき、野菜を育てる、そんなおじいちゃんになりたい」と J 氏は私に語ったことがある。日々の仕込みに汗をかきながら、J 氏は将来の店舗について思案している。

＊

次はM氏（2018 年現在、48 歳、既婚、女性）である。芸術系の大学でピアノを学んだ M 氏は、卒業を控えた 1993 年 2 月、「いまとは異なる環境のところに行ってみたい」と考えて周囲に相談した。ある教員が、一人旅でもバリ島のウブドであれば比較的安全であろう、知り合いの芸術一家がいるので、そこを訪ねるとよい、と助言を与え、紹介してくれた。

このはじめてのバリ旅行で、M氏は約 3 週間この家族とともにガムラン音楽を学んだ。その後も短期の旅行でウブドを訪れ、この年の後半にはデンパサールの芸術大学に留学した。滞在地はウブドであった。この家族と親交を深めたM氏は、一家の次男と 1998 年に結婚した。結婚の前後にはバリ芸能のワークショップやコーディネートなどの仕事に携わったが、バリ芸能を深く知るようになるにつれて、それを教えたり伝えたりすることの難しさや不安も感じるようになった。出産に前後する時期には、ブティック店を開き、衣服の作成販売を手掛けた。比較的軽い気持ちではじめたビジネスであったこともあり、2002 年のクタでの爆弾テロ事件後には 2 号店を閉め、1 号店も 2005 年に閉めた。

M氏は、年 1 度程度は日本に帰っていたが、2005 年にはひとり息子を日本の幼稚園に通

わせるために、夫をバリにおいて、ふたりで日本の実家に帰った。「子どもを 1 年間幼稚園に入れて、この 5 歳前後の時期にしっかりと日本語を覚えさせたかった。この時期にやっておくと、一生身につくから」。そして予定通り、約 1 年後にバリに戻った。「日本に長く行っていたので、帰ってこないのではないかと思う人もいたようだが、私はもともと日本に住む気はないし、バリでずっと暮らすつもりであった」。日本では、はじめの 2 か月でもうバリに帰りたい、帰ろう、と思ったが、親も、もうすこしがんばれ、こんなに長くいるのは今回だけなんだから、あとは長くバリに住めるんだから、と励ましたという。夫は、家族で創立したガムラングループの公演のため、その年に来日した。子どもは、父との生活が再開してうれしそうだったという。M氏自身、夫と離れて精神的にたいへんで、日本からバリへの電話代だけでバリに戻れるくらいの金額になったという。子どもは、バリに戻ってすぐはバリ語をすっかり忘れていたが、その後ふたたび話すようになった。

M氏の夫は、友人の勧めもあり、日本で彫金の仕事を覚え、日本からのオーダーをバリで受けて 3 年ほどこの仕事をおこなったこともある。ただ、本来の仕事は絵描きである。ガムラン奏者でもあり、多彩な芸術家である。夫の父や兄も芸術家であり、一家が村の行事の芸術に重要な役割を果たしている。夫は、夜中に創作をすることがおおく、朝から寝て昼や夕方に起きる、という生活パターンである。夫の得意なジャンルは、ヒンドゥー・仏教の神話や叙事詩をモティーフにした宗教的絵画である。

バリ人の日常言語はバリ語であり、M氏の子どもは、学校に入るまでインドネシア語にあまり慣れていなかった。しかし、やがてインドネシア語にも慣れ、成績も急速に上がり、M氏も夫もほっとした。「そのときはひと山越えた感じだった」という。

M氏は「もし自分が日本にいたら、いまの夫と結婚していたとしても、離婚してしまっていたと思う。バリにいるから、こうして一緒に暮らしていけるんだと思う」「日本の家に帰っても、居場所がなくて落ち着かない。でもバリに帰ってきて、［夫の実家にある］自分の建物にいると、本当に落ち着く」と述べる。2005 年の日本での長期滞在の際、M氏が応援するプロ野球の阪神タイガースが優勝した。大好きな阪神の優勝というとてもすごいことがあったにもかかわらず、やっぱりバリに帰りたいと思った、という。「ここまでいいことがあったのに、帰りたいという気持ちがあった」ことに、あらためてM氏は自身のいわばバリ愛とでもいいうるものを再発見した。

しかし、そうしたM氏は、2018 年現在、日本で暮らしている。子どもが小学 5 年生だった 2011 年に、体験的に日本の小学校に入ったところ、日本の学校に行きたいと強く希望したので、中学・高校生活を日本で暮らすことにしたのである。M氏は、日本でインドネシア語の通訳士をしている。子どもは、学校は日本の方がいいが、生活はバリがいいと感じているようだという。学校の休みなどを利用し、1 か月前後の短い期間、バリに帰る。2019 年春の高校卒業後は、親子でバリに戻り、子どもはバリにある芸術大学で学ぶ予定である。M氏は「これでようやく［日本での暮らしから］釈放される」という。

M氏は、夫の実家に心底居心地のよさを感じるが、それだけではなく、バリの気候や、バリ人あるいはインドネシア人との人間関係にも心地よさを感じるという。「バリのあの家は安らぎのホームであるが、それはウブド、バリ、そしてインドネシアに広がっている。バリ人やインドネシア人という、人があってこそのホームだと思う」と述べる。

2000 年代前半に、M氏は、デンパサールでバリアン（balian; 占い師／呪術師）にみても

らったことがある。すると、そのバリアンは、あなたの夫は創造的な仕事をしており、家族全体が芸術などに関わっているね、といった。確かに、夫の家族は芸術一家である。そして、今後あなたがやるべきことは夫を支えることである、そのために夫の祖先の霊があなたをこの家に招いたのだ、といった。実は、M氏は、大学卒業後すぐにウブドで長期滞在をはじめ、バリが好きで、バリ人であるいまの夫と結婚したが、自身はガムランや踊りが大好きというわけでもなく、なぜこれほど心地よくこの家で暮らしているのか、不思議に感じていた。しかし、この託宣を聞き、だから自分はバリにいるのか、だから夫の家にいると居心地がいいのか、と腑に落ちたという。M氏は、音楽と絵画に秀でた才能をもつ夫がバリ内外での演奏や行事に行く際の書類の作成も、夫の代わりにすべておこなう。夫は、俺のおかげでお前は何でもできるようになったとうそぶいている、という。

写真５　M氏宅のプランキラン

2011 年から日本で長期滞在をはじめた翌年、バリから日本に戻る際、M氏は聖別化したプランキラン（plangkiran; 簡易な祠）を日本の家にもってきた（**写真５**）。バリでは頻繁に儀礼があったが、日本ではそれがなく、何か物足りない感じであったからだという。気候や家族とともに、儀礼あるいは宗教も、M氏にとってはバリでの暮らしが心地よいものと感じられる重要な要因である。日本では、夜寝る前、毎日ヒンドゥーの祈りをする（cf. 吉田 2000）。花や聖水は使わないが、ときどき酒をささげる。これはいわば自己流である。祈りの際は、まずバリ語のマントラの最初の一節を唱える。夫の母が、このはじめの一節だけでとりあえずよいと助言してくれた。そのあとは、日本語で、今日も無事に過ごせてありがとうございます、明日もまたいい日でありますように、よろしくお願いいたします、といった趣旨の祈りをささげる。これも自己流といえる。

以上のように、M氏は、大学を卒業して間もなくバリに留学し、バリ人と結婚し、バリをホームとする生活に入っていった。バリの芸術や文化に強く惹かれたわけではなく、どういった具体的な理由でバリに心地よさを感じ、ここを居場所とするようになったのかは、M氏自身にとってもやや謎といえるところがあった。B氏やC氏とは異なるが、M氏と夫の生活や仕事も何度かの転機を経ており、数年前から、M氏は、子どもにとっての環境を第一に考えて、日本の実家という、M氏にとってのアウェイでの生活をつづけている。M氏は、いまは短いホームへの帰還を年に何度か繰り返すことで我慢している。その現在の姿は、バリでの短い滞在を繰り返す、日本に拠点をもつリピーター観光客の姿に似ている。ただし、M氏には、夫とその家族や実家という確たるホームがバリにある。M氏は、このかけがえのないホームに夫とともにずっと居つづけたいが、子どもの未来に鑑みて、それをいましばらくは断念する選択をしているのである。

＊

N氏（2018 年現在 59 歳、独身、男性）は、M氏と同様、現在日本で生活している。N氏

の場合、すでに 15 年以上バリに戻っていない。バリあるいはウブドにできるだけ長く滞在したいが、資金が切れるなどで日本に帰らざるをえなくなり、ふたたびバリにやってくる計画をもちながらもそれが果たせずにいる、というタイプのひとりとして、彼を取り上げることにする。

旅行が趣味のＮ氏は、国鉄が分割民営化された際に退職を余儀なくされ、その後は、日本で 1 年ほど働き、半年ほど海外旅行に出掛け、資金が尽きると日本に戻ってまた働いて資金を貯める、という生活を繰り返した。すでに世界 40 国以上を旅したＮ氏は、台湾からオーストラリアを経由し、1993 年にはじめてバリ島に入り、ウブドを訪れた。台湾で知り合った日本人から、ウブドがいいと聞いたからだという。そして半年の滞在期間のほとんどをウブドで過ごし、バリ人や長期滞在する日本人との間に交友関係を築いていった。踊りや絵画を習ったりするわけではなく、散歩や食べ歩きをしつつ友人関係や情報網を拡大・深化させ、ときには友人とともに行動するという、気ままな過ごし方をした。2 度目のウブド来訪は 1995 年であり、それ以降は、半年バリに滞在し、半年ほど日本でアルバイトをして 100 万円強を貯めるという生活を、2000 年まで繰り返した。1993 年のときも含め、日本人観光者の滞在期間はビザなしで最長 2 ヶ月であったので、半年間の間に 2 度シンガポールに出国しすぐ戻った。ずっとウブドにいても退屈なので、たまにシンガポールに出ることはよかった、とＮ氏はいう。当初はホテル（民宿）暮らしであったが、途中からは友人となったバリ人の営む下宿やその家に部屋を借りるようにした。

1995 年の滞在の際には、宿を借りるなど世話になったバリ人宅に、バロンとランダを寄贈した（**写真６・７**）。Ｎ氏自身は、バリの宗教や芸術にとくに関心があるわけではなかったが、日本人長期滞在者である友人の助言から、村への寄付という趣旨でこのような贈り物をしたのである。当時は物価が高騰する前であったので、購入の総額は 30 万円弱程度であ

写真６・７　Ｎ氏が寄贈したバロン（左）とランダ（右 2 体）

ったという。居候をした別のバリ人宅に冷蔵庫を買うなど、ウブドにおけるＮ氏の暮らしぶりは質素なものであったが、友人たちにはある種の気配りをしていた。

Ｎ氏は、90 年代半ばから、周囲の日本人やバリ人にも感化され、自分もバリでビジネスをはじめようと考え、アイディアを温めはじめた。たこ焼き屋やうどん屋を日本人と共同ではじめる、というものもあったが、単独での起業を目指すというものもあった。ひとつは、構造的にも形状的にもユニークで根強いファンもおおいバイクであるヴェスパのオートマチックタイプを何台もそろえ、観光者向けのレンタル業を営む、というものであった。もう

ひとつは、定番であるバリ発 1 泊 2 日のボロブドゥールのツアーに、中部ジャワにある汽車博物館（Museum Kereta Api）での SL 乗車体験を組み込んだ、鉄道ファン向けのオリジナルツアー商品の開発と運営であった。インドネシア語と英語ができるN氏自身が案内役をつとめ、日本あるいは他国の鉄道好き観光者に、山道での SL 乗車体験（しかも好みの車両を選択できる）という世界でもまれな体験旅行を提供する、というものである（cf. 古賀 2014: 137-142）。

こうした企画を練る中で、しかし、N氏は、2000 年に日本に戻ってからは、すぐのバリ行きは見送り、1 年半ほど貯金をして、2002～3 年に中南米を半年ほどかけて旅行した。N氏がこれまで繰り返してきたウブドでの断続的な滞在をいったん中断し、別天地に久しぶりに向かったのは、お金を貸したが返却されなかったり、嘘をつかれたり、居候していた友人宅で重要な物品がなくなったり（N氏は盗まれたと理解する）、いくつか不愉快なことが重なったからであった。N氏は、しばらく冷却期間を取ろうとしたのである。しかし、ふたたびバリ行きを考えていたN氏は、その後、海外旅行自体を見送らざるをえなくなった。両親の体調がおなじ時期から悪くなったのである。両親の介護をひとり自宅で引き受けることになったN氏は、日帰りで国内旅行に行くことはあっても、家を空けることはできなくなった。父が認知症となったことがおおきな理由である。旅行好きのN氏にとって、つらい生活がつづいた。そして、約 10 年の介護の末、2016 年の 2 月に父は亡くなった。残された母の介護のために、N氏はいまも家を離れることはできない。

N氏がはじめて訪れた外国はスイスであった。居心地のよいホームと思うのはスイスである、とN氏はいう。スイスには 4 回、いずれもバリ来訪以前に行った。スイスは居心地がよかったが、外国人扱いされることについては違和感を覚えた、一方そうした違和感はバリではなかった、という。ただ、「バリがホームという感覚はない。バリは稼いで暮らすところである」。N氏はこれまでバリで稼いだことはないが、ジャワでの SL ツアーやウブドでのたこ焼き屋開業などの計画をいまも温めているN氏は、未来に向けてバリあるいはウブドをそう位置づけているのである。N氏は、ウブド在住の友人たちが SNS にアップする各種の情報やメッセージにこまめに目を通しコメントし、ウブド発信のネット上ラジオ番組を視聴している。C氏の c 国行き前の日本でのパーティーにも出席した。このように、N氏にとって、バリとそこで得た友人は、いまも大切なものである。

2017 年のインタビューの際に、母の介護から解放されたらまずどこに行きたいか、と訊くと、N氏は即座にバリだと答えた。N氏にとって、スイスは観光者として訪れたい安らぎの地なのであろう。ただ、スイスは物価も高く、そこにずっと暮らしていくことは難しい。一方、バリは、N氏にとってかならずしも安らぎの土地ではないが、自身が今後どこでいかに暮らしていくかを考えたとき、人間関係・言語・経済面などさまざまな観点から、有力な選択肢となるのであろう。N氏にとって、バリは、いやなこともあったが、そこで生きていくことができると実感できる場所であり、おそらくは日本よりも有力な未来の居場所の候補地なのである。ただ、N氏にとっての未来のホームは、いまはまだ確定していない。

以上をまとめよう。1990 年代のN氏は、日本で半年ほど黙々と働いて 100 万円強を目安に貯金し、これを半年間ウブドにほぼずっと滞在して消費しつつ、ここで繰り広げられる日本人やバリ人の人間模様や人間関係の中に自身も加わって過ごしていた。ウブドでの生活こそN氏のいわば陽の部分であり、日本での生活はそれを支える影の部分であったといえ

る。N氏は、バリの宗教文化や芸能あるいは自然や動植物などに、とくに強い関心をもっていたわけではない。たまに友人らと儀礼・祭礼・芸能の見学に出かけることはあったが、それも、そうした人々が織りなす日々の活動の広がりの中に自身の居場所を求め、そこに居心地のよさを感じていたからであろう。その点では、N氏にとってのホームはウブドという観光地ではなく、そこに展開する人間関係の束にこそあったように思われる。ただし、これは 15 年以上も前のことである。その後のN氏は、バリ再訪を果たせずにいる。ひとりで両親の介護をすることになった自宅は、N氏にとっては安らぎのホームとはいいがたいものであろうが、その中でN氏はバリを未来のホームとみるまなざしを温めている。

＊

東京でフリーランスの出版関係の仕事を精力的にこなしていたQ氏（2018 年現在 68 歳、独身、男性）は、1992 年にはじめての海外旅行でバリ島を訪れた。南部バリでの取材が目的であったが、取材パートナーと 3 日間の休暇を取ろうということになって、Q氏は中部のウブドを訪れた。「この 3 日の休みがなかったら、そしてウブドに来なかったら、バリにこうして移住しなかっただろう」とQ氏はいう。ウブドでは、慣習衣装をまとい、神にささげる供物を頭上に乗せてゆっくり道を歩く女性や、盛大な火葬によって死者を見送る人々の明るい姿に出会った。あくせくした日本での生き方とはまったく別の世界を見た思いがし、これでいいんだ、こういう生き方でいいんだ、と感じたという。

Q氏は、日本でずっとそのまま仕事をつづけようとは思っていなかった。自分の思うような仕事ができているという実感があまりなかった、という点もある。また、父親が死去したことも、移住を考えるひとつのきっかけとなった。自分もやがて死ぬ、自分はこのままでいいのだろうか、いや、こういう生き方ではいけない、人生のリセットが必要だ、と思ったQ氏は、数度のバリ旅行を繰り返した。しがらみはなく、日本に未練もなかったが、当初は 1 年や 2 年程度のバリ滞在を考えていたという。

1995 年 1 月には、ウブドで暮らすのであれば何ができるかを下調べすることをひとつの目的にバリを訪れ、2 か月間滞在した。周囲にいたウブド在住日本人たちのように起業することは考えていなかった。ただ、知り合いのバリ人には、日本語学校の先生を紹介してもらうなどした。そして、帰国の直後、地下鉄サリン事件が起こった。これがもうひとつのきっかけとなって、閉塞感のある日本での生活に嫌気がさしたQ氏は、この年、バリへの移住をいよいよ実行に移すことにした。

Q氏は、当初、無報酬で、日本語学校で週に 1〜2 回、発音を教える手伝いをすることになった。しかし、Q氏のビザは、本来仕事をしてはいけないものであったので、問題であるとわかってすぐに、この仕事は辞めた。バリでの生活費の出処は、現地の銀行に預けた貯金の利子であった。当時、インドネシアの銀行では 10%を超える高い利子がついていた。しかしながら、そこにインドネシア通貨危機が到来した。通貨の交換レートは、1 万円が約 20 万ルピアから約 100 万ルピアへと、ルピアを基準にみれば急落した。Q氏にとって痛手だったのは、所持金のほとんどを現地通貨にして銀行に入れていたことであった。友人に借りていたお金をここで返済したが、それによって、日本に帰るチケット代をのぞき、所持金がほぼ底をついてしまった。

窮地に陥ったQ氏は、いったん日本に「出稼ぎ」のために戻った。しかし、仕事をしようにも、オフィスの椅子にじっと座ってデスクワークをすることができなくなっていた。バリ

での生活に馴染んでいた体が、日本での仕事を拒んだのである。日本でもはや暮らしていくことはできないと悟ったQ氏は、ふたたびバリでの暮らしに戻った。今度は、いわば退路を断った移住であった。

金銭的な余裕はなかったが、時間はたっぷりあったので、Q氏は、ある友人から聞いた、バナナの茎からとれる繊維を加工した紙の制作をはじめてみた。この種の作業に取り組んだ経験はなかったが、工程に関する記録を取りながら試行錯誤を重ねる中で、関心もいっそう高まり、思うような紙素材のつくり方もわかってきた。また、その過程で、自分が作成する、自然な風合いをもったこの紙は、書くためのものには適さず、アートやインテリアの素材にむしろ適したものであること、作家性の強い凝ったものではなく、一定の汎用性のあるものをつくる方向に向かうべきことも、明確になった。Q氏の紙は、アジア雑貨を大量に買い付けるバイヤー向けの量産品でもなく、短期バリを訪れる観光客向けの高付加価値品でもなかった。日本人の友人がウブドに開いた雑貨店に、いわば軒を借りるかたちで商品を並べたことはあったが、観光シーズンのオン／オフのギャップや、バリの観光関連店舗が 1990 年代後半からたどった浮き沈みを目の当たりにしていたため、流動的で不安定な観光マーケットとつなげていくことは、当初から考えていなかった。

こうして、Q氏は、観光とは関わらない国内のアートや建築関係の需要に応えるような価格設定や紙型サイズなどを追求する方向に向かった。この選択は、意識的なものであったと同時に、Q氏の紙制作を取り囲む環境や諸条件によるものでもあった。幸い、インドネシア国内の建築プロジェクトで採用される実績も獲得していく中で、Q氏は、自身がつながっていくべきはバリ人・インドネシア人であることを確信していった。バリに暮らす以上、観光地という観点からすれば逆説的かもしれないが、バリ人・インドネシア人とのつながりがなければここで生きてはいけない、という思いもあった、という。

国内に徐々に販路が広がっていくとともに、直接知り合いとなった海外の建築家やデザイナーからの問い合わせも来るようになった。こうして、さらにおおくのアーティストや建築デザイナー・クラフトマンの注目を受けるようになり、紙制作の仕事は次第に回転するようになった。知人に騙されて借金を抱えるなど、その後も苦難の経験はあったが、一方で、比較的おおきな契約も入るようになった。Q氏は、この紙の制作において、人生の中ではじめて、自分が思っていることと自分がつくったものとが一致した感覚があった、という。

現在のQ氏は、ウブドから数キロ離れた村にある工房で、バリ人スタッフとともに紙制作をおこなっている。ときには仕事がまったく入らない時期もあり、大型の契約がキャンセルとなりかけることもある。むろん、当初の試行錯誤の時期よりは生活は落ち着いているものの、自転車操業的な部分はあり、かならずしも安定した生活という感覚はない。フリーランスの仕事を選択した以上、そうしたことは仕方がない、と考えている。

工房は、ウェブサイトもなく、営業・宣伝もしておらず、口コミだけにあえて依っている。しかし、Q氏の紙への評価は着実に浸透している。2018 年に招待を受けて参加した、建築家と各分野のデザイナーを対象にしたワークショップでは、初対面であったクラフトマンたち全員がQ氏の紙を知っていた。また、その主催者でもあった若手の有力な照明作家から、いま紙といったらあなたの紙、これが常識だ、ともいわれた。このとき、Q氏はあらためて自身のおかれている状況を再認識したという。人間関係のネットワークと販路は、さらに広がりを見せている。

＊

以上、ここまで数人の事例を記述してきた。ここであらためてひとつ注目したいのは、M氏やN氏のホームのあり方である。第 1 節・第 2 節で論じたように、いま住んでいる場所がかならずしも本人の希求するホームであるとはかぎらないのである。

N氏のほかにも、ウブドで数年ほど滞在したものの本格的なビジネスをウブドではじめるにいたらず、資金切れによって日本に帰国せざるをえなくなった者や、諸般の事情から望んだウブドでの長期滞在を断念せざるをえなくなった者は、いる。逆に、N氏と同様の経験をしたのちに、念願のウブドでの暮らしをはじめた者もいる[12]。拙論では（吉田 2013b）、バリでビジネスをはじめたが、現地人ビジネスパートナーの詐欺にあったというケースや、結婚を予定していたものの、婚約者に相当するバリ人から一方的に別れを告げられたというケースに触れた。結婚後に、夫の金銭問題からバリでの生活を断ち切った者もいる[13]。そうした不本意なケースは、私の見聞する範囲では決しておおくない。ただ、さまざまな事情によって、ウブドというホームを求めても得られない人々がいること、逆にいえば、相対的にはアウェイである日本でふたたび暮らすという選択をせざるをえなくなった人々が一定数いるということは、ここであらためて確認しておきたい。

では、そうした広がりを念頭におきつつ、以上の記述を踏まえて、議論をまとめることにしよう。

５．結　安らかならぬ楽園を生きる

第 1 節では、現代人にとっての「ホーム」が確たるものではなく、血縁や地縁にかならずしも根づかない複数の場所にまたがる場合もある、という点に触れつつ、「ホーム」を想像の次元にあって希求される、だが捕まえようとしてもすり抜けていくことがある、リキッドなものと捉えることから、議論を出発させた。そして、第 2 節では、あらためて主題を画定し、本稿の議論枠組みや視座として次の 4 つの点に触れた。①何らかの一般化された論点の追及にではなく、個別具体的な民族誌的事実の記述を主目的とする。②移住と滞在、移動と定着とを連続線上にあるものとみなす立場から、日本人ウブド愛好家の「日本人としてウブドに生きる」というアンビバレントなライフスタイルの実態を捉える。③女性に注目する先行研究にたいして、男性の事例を上乗せすることに留意する。④約四半世紀の時間軸の中

[12] ある日本人男性（独身）は、40 代であった 1990 年代半ばからウブドを頻繁に訪れるようになったが、親の介護を引き受けたため、十数年にわたってバリにまったく来ることができなくなった。母が亡くなり、身辺整理をしたのち、70 歳となった 2016 年から、彼はウブドでの新たな生活をはじめた。

[13] ある日本人女性は、バリで数年働く中でウブドを気に入り、ここで暮らしたいと望んだ。その後、出会ったバリ人男性と結ばれ、ふたりは観光者向けの店舗を開業した。バリでの生活は順調であったが、開業後 10 年を経たころ、夫が彼女に内緒で借金をしていることがわかった。しかも、おそらく以前から積もっていたその金額は、返済のめどが立たないほどの高額となっていた。夫への信頼感を失った彼女は、夫に一切告げず、子どもを連れて（おそらく日本に）出国するという決断をした。彼女は、ウブドあるいはバリで暮らしたいという強い思いをもっていたが、いずれ訪れるであろう経済的破局の前に、夫・住まい・店舗そしてバリを捨てるという苦渋の選択をしたのであった。

で、グローバル化やリスク社会化にさらされる観光地ウブドの変化とそこに生きる人々にとってのホームの変化や揺らぎを理解する。

第 3 節では、バリやウブドの近年の変化について概観し、第 4 節では、観光地ウブドに生きる日本人にとっての、それぞれのホームのかたちを記述的に理解しようとした。観光者として訪れる経験を重ねてウブドでの定住を決意した者もいれば、当初から日本の外に新たな居場所を求めた者もいる。この地で自ら生活資金を稼ぐ必要のない者もいれば、その必要のある者もいる。途中でその状況が変わった者もいれば、生活資金獲得の方途を見つけられずに日本に帰国した者もいる。バリ人と結婚し家族とソリッドなホームにずっと暮らす者もいれば、そうした安定したホームをバリに持ちながらも、日本とバリの間で生活の拠点をかえ、過渡期のリキッド・ホームに生きる者もいる。また、事例として詳しく取り上げなかったが、バリ人配偶者との別居や離婚を経験し、バリを離れる者もいれば、別居や離婚後もバリで生活をつづける者もいる。一度はバリを終の棲家とする決意を固めても、諸般の事情からそうした決意が流動化する経験をする者もいる。彼らウブドを愛する日本人のホームのあり方はさまざまであり、そのあり方はバリという観光地の社会状況によって比較的短い期間の中で変わりもする。本稿の記述は、その一端を描いたものである。

第 3 節・第 4 節での議論に即してあらためてここで確認しておきたいのは、1990 年代から 2010 年代にいたる時間の経過の中で、ウブドをホームとして生きる日本人にとって、当初は予期しなかった事態が次々と生じた、という点である。日本人移住者が増えはじめた 90 年代、バリそしてウブドの観光地化は右肩上がりの状況にあった。この流れを受けて、ウブドの日本人による店舗も増加していった。そして 1997 年に通貨危機が起こり、スハルト体制は崩壊した。その後の民主化とさらなる地方分権化の進展は、彼らが予想しなかったプラスの出来事であったと考えてよいであろう。しかし、その一方で、ルピアの極端な下落によって当初の生活スタイルに変更を迫られた移住者もいる。また、その後のバリ観光は、爆弾テロ事件、SARS、鳥インフルエンザ、地震と津波などがつづき、回復してはダメージを受けるという状況を迎えることになった。2000 年代後半になると、そうした不安定な状況からは脱するが、その後は地価や物価の急激な高騰、ウブドに来る日本人観光者の減少など、彼らの予測をこえた変化が顕著になってきた。現在、観光地ウブドの持続的な発展傾向はつづいている。しかし、小規模経営の集積体である観光地ウブドにおいて小規模経営の観光ビジネスを営む日本人にとって、現状は敗者への転落のリスクをつねに抱えたものと受け止められている。観光ビジネスが今後も順調にいくという保証はどこにもない、ということを彼ら自身が自覚しているのである。また、リタイアビザを取得しおもに年金で暮らす日本人にとっても、物価の高騰はおおきな打撃である[14]。この点で、観光ビジネスへの関与如何にかかわらず、彼ら日本人にとっての楽園ウブドでの暮らしの未来はかならずしもバラ色ではない。A氏のように、当初からほぼ一貫して楽園ウブドでの暮らしぶりが変わらないように見受けられる者もいるが、そうしたケースはどちらかといえば少数派である。90 年代か

[14] C氏は、1990 年代には、ぜいたくしなければ月 2 万円ほどで生活できたが、2010 年代に入ると、5 万円程度は必要になった、と述べたことがある。円にたいするルピア安の傾向は通貨危機以降持続しているので、インドネシア人にとってはこの四半世紀の間に物価は 5～6 倍かそれ以上上がっていることになるが、他地域に比べて観光地バリの物価高騰はとくに顕著なものがある。

らウブドに在住する日本人そしてバリ人のおおくにとっては、「安らかな楽園」が急速に「安らかならぬ楽園」へと変質していったと考えられる。

ルーマンにしたがえば、リスクは自己生産的（オートポイエティック）なものであり、リスクを回避し安全を高める努力や選択がかえってリスクを招く可能性がある（Kneer & Nassehi 1995(1993); 小松 2003; Luhmann 2007(1986), 2014(1991); 山口節 2002: 164-175）。この点からすれば、日本での生きづらさから、居心地のよい楽園ウブドへの移住を決意した者にとって、こうしたリスクの回避のためのホームの再選択は、当初の時点では思ってもみなかった出来事の連鎖によって、別のリスクとなって跳ね返ってきているといえる。さらに、今日の日本人観光者が、心身のリスク軽減のひとつの手段たる楽園観光の目的地としてウブドをあまり選択しなくなりつつあること、そしてそれが集団化し時系列的に蓄積していくことが、ウブドで日本人を主要な顧客としてビジネスを営む一部の人々にとっては、さらなるリスクの増大へと再帰的につながってもいる。

リスク社会の中にある現代人は、生活圏のかなたに存在する「楽園」に癒しを求めて訪れる。心身の健全さの維持やリフレッシュのための余暇活動としての観光には、新規の観光地や新規の観光施設こそ、魅力的なものに映る。それゆえ、いまも世界の各地では、あらたな楽園観光地が開発され、既存の観光地もさらなる自己との差別化のために再開発を受け、新たな施設が建設されている。こうして、楽園観光地はいまも世界中で、そしてインドネシアやバリの中でも、拡大再生産されている。しかし、同質のシミュラークルに彩られた楽園観光地のさらなる増殖・発展は、個別の楽園観光地の停滞というリスクをつねに内包するものである（吉田 2016a）。このように、楽園観光の発展と俯瞰的にみられる現象は、個別の楽園観光地のリスクの高まりと微視的にみられる現象を表裏一体にともなっている。

もちろん、予期せぬ社会変化や事態の推移に翻弄されるのは、ウブドに暮らす日本人に固有の事柄ではない。バリ人はもちろん、第 1 節で触れた日本の都市部に暮らす日本人も含め、そのことは世界リスク社会の中に生きるすべての人々に大なり小なり当てはまる。「日本人としてウブドに生きる」というアンビバレントなライフスタイルが、「日本人として日本に生きる」や「バリ人としてウブドに生きる」といったライフスタイル以上に、多くのリスクを抱えるものだと即断したり一般化したりすることもできない。また、時間の経過とともに、インドネシア国籍の子どもが家族の中核となって、新たなホームのかたちを再構築あるいは再選択するという者もいるであろう。ただ、彼ら日本人ウブド愛好家が、世界リスク社会の中にあって観光経済依存体質を深める楽園観光地バリが抱える多重のリスクとその顕在化に今後も向かい合い、その時々の決断や答えを模索しつつ生きていくであろうことは、おそらく確かであろう。それは、グローバリズムの中で翻弄されつつそれぞれのホームを求めて生きる世界各地の人々と、何がしかのかたちでつながっている。

謝辞　本稿の執筆に当たって、ウブド在住のおおくの方々にご理解とご協力をいただきました。この場を借りて、あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

附記　本稿を、2017 年 4 月 28 日に帰天された、同僚の故サガヤラージ神父・准教授に捧げたい。インドのタミル出身のサガヤラージ神父は、日本での教育を自身の天命とし、日本を自身の第 2 のホームとしてこよなく愛していた。余命宣告を受けた後、インドの故郷に

いったん帰ったが、家族のいるタミルではなく、日本で死を迎えることを選択した。彼の揺るがなかったホームにたいする心情と、ときに頑固であった彼の人となりを思い返し、心から哀悼の気持ちを捧げたい。なお、本稿は、南山大学 2018 年度パッヘ研究奨励金 I-A-2 の助成にもとづく研究成果の一部である。

参考文献

Augé, Marc

2017(1992)　『非ー場所――スーパーモダニティの人類学に向けて』、中川真知子訳、水声社。

Baudrillard, Jean

1984(1981)　『シミュラークルとシミュレーション』、竹原あき子訳、法政大学出版局。

1995(1970)　『消費社会の神話と構造』、今村仁司・塚原史訳、紀伊国屋書店。

Bauman, Zygmunt

2001(2000)　『リキッド・モダニティ――液状化する社会』、森田典正訳、大月書店。

2007(2004)　『アイデンティティ』、伊藤茂訳、日本経済評論社。

2008(2001)　『コミュニティ――安全と自由の戦場』、奥井智之訳、筑摩書房。

2012(2006)　『液状不安』、澤井敦訳、青弓社。

Bauman, Zygmunt & Tim May

2016(2001)　『社会学の考え方〔第 2 版〕』、奥井智之訳、筑摩書房。

Beck, Ulrich

1998(1986)　『危険社会――新しい近代への道』、東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局。

2003(2002)　『世界リスク社会論――テロ、戦争、自然破壊』、島村賢一訳、平凡社。

2014(1999/1993)　『世界リスク社会』、山本啓訳、法政大学出版局。

2017(2016)　『変態する世界』、枝廣淳子・中小路佳代子訳、岩波書店。

Beck, Ulrich & Elisabeth Beck-Gernsheim

2014(2011)　『愛は遠く離れて――グローバル時代の「家族」のかたち』、伊藤美登里訳、岩波書店。

Beck, Ulrich; Anthony Giddens & Scott Lash

1997(1994)　『再帰的近代化――近現代における政治、伝統、美的原理』、松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳、而立書房。

Benson, Michaela Caroline

2014(2011)　*The British in Rural France: Lifestyle Migration and the Ongoing Quest for a Better Way of Life*, Manchester: Manchester University Press.

Benson, Michaela & Karen O'Reilly (ed.)

2016(2009)　*Lifestyle Migration: Expectations, Aspirations and Experiences*, London & New York: Routledge.

Benson, Michaela & Nick Osbaldiston

2014a(ed.)　*Understanding Lifestyle Migration: Theoretical Approaches to Migration*

and the Quest for a Better Way of Life, Palgrave Macmillan.

2014b New Horizons in Lifestyle Migration Research: Theorising Movements, Settlement and the Search for a Better Way of Life, in Benson & Osbaldiston (ed.) *Understanding Lifestyle Migration: Theoretical Approaches to Migration and the Quest for a Better Way of Life*, pp. 1-23.

Byczek, Christian

2010 *Community-Based Ecotourism for a Tropical Island Destination: The Case of Jaringan Ekowisata Desa - a Village Ecotourism Network on Bali*, Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.

Clliford, James

2002(1997) 『ルーツ――20 世紀後期の旅と翻訳』、毛利嘉孝他訳、月曜社。

Couteau, Jean

2015 After the Kuta Bombing: In Search of the Balinese 'Soul' with 2015 Postscript, in Putra & Campbell (ed.) *Recent Developments in Bali Tourism: Culture, Heritage, and Landscape in an Open Foretress*, pp. 271-309, Denpasar: Buku Arti.

Cuthbert, Alexander

2015 Paradise lost, Sanity gained: Towards a Critical Balinese Urbanism, in Putra & Campbell (ed.) *Recent Developments in Bali Tourism: Culture, Heritage, and Landscape in an Open Foretress*, pp. 326-368.

Deleuze, Gilles

2007(1990) 「追伸――管理社会について」『記号と事件 1972－1990 年の対話』、宮林寛訳、pp. 356-366、河井出書房新社。

Elliott, Anthony & John Urry

2016(2010) 『モバイル・ライブズ――「移動」が社会を変える』、遠藤英樹他訳、ミネルヴァ書房。

藤田 結子

2008 『文化移民――越境する日本の若者とメディア』、新曜社。

Geertz, Clifford

1959 "Form and Variation in Balinese Village Structure", *American Anthropologist* 61: 991-1012.

Geertz, Clifford & Hildred Geertz

1975(1989) *Kinship in Bali*, Chicago: University of Chicago Press.（『バリの親族体系』、鏡味治也訳、みすず書房。）

Giddens, Anthony

2001(1999) 『暴走する世界――グローバリゼーションは何をどう変えるのか』、佐和隆光訳、ダイヤモンド社。

Haans, Heiko; Michael Janoschka & Vicente Rodriguez

2017(2014) Final reflections and future research agendas, in Janoschka & Haas (ed.) Contested Spatialities, Lifestyle Migration and Residential Tourism, pp. 207-

214.

Habermas, Jürgen

1987(1981)　『コミュニケーション的行為の理論（下）』、丸山高司他訳、未来社。

1994(1990/1962)　『第 2 版　公共性の構造転換――市民社会の一カテゴリーについての探求』、細谷貞雄・山田正行訳、未来社。

Hitchcock, Michael & I Nyoman Darma Putra

2007　*Tourism, Development and Terrorism in Bali*, Hampshire: Ashgate.

Howe, Leo

2001　*Hinduism & Hierarchy in Bali*, Oxford: School of American Research Press.

2014　Chess and an Indonesian Microcosm: A Glimpse of a Nation's Social Dream?, in Hauser-Schäublin & Harnish (ed.)　*Between Harmony and Discrimination: Negotiating Religious Identities within Majority-Minority Relationships in Bali and Lombok*, pp. 354-373, Leiden & Boston: Brill.

Interim Consulative Group on Indonesia

2002　*Vulnerabilities of Bali's Tourism Economy: A Preliminary Assessment*, Informal World Bank Staff Paper. (http://fama2.us.es:8080/turismo/turismonet1/economia%20del%20turismo/turismo%20zonal/lejano%20oriente/vulnerability%20of%20Bali's%20tourism%20economy.pdf)（2015 年 2 月 6 日取得）

伊豫谷　登士翁

2013(編)　『移動という経験――日本における「移民」研究の課題』、有信堂高文社。

2014a　「移動のなかに住まう」、伊豫谷登士翁・平田由美（編）『「帰郷」の物語／「移動」の語り――戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』、pp. 5-26、平凡社。

2014b　「移動経験の創りだす場――東京島とトウキョウ島から「移民研究」を読み解く」、伊豫谷登士翁・平田由美（編）『「帰郷」の物語／「移動」の語り――戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』、pp. 293-327。

Janoschka, Michael & Heiko Haas

2017(2014)a(ed.)　*Contested Spatialities, Lifestyle Migration and Residential Tourism*, London & New York: Routledge.

2017(2014)b　Contested spatialities of lifestyle migration: Approaches and research questions, in Janoschka & Haas (ed.) *Contested Spatialities, Lifestyle Migration and Residential Tourism*, pp. 1-28.

加藤　恵津子

2009　『「自分探し」の移民たち――カナダ・バンクーバー、さまよう日本の若者』、彩流社。

Kaplan, Caren

2003(1996)　『移動の時代――旅からディアスポラへ』、村山淳彦訳、未来社。

Kneer, Georg & Armin Nassehi

1995(1993)　『ルーマン社会システム理論』、舘野受男・池田貞夫・野崎和義訳、新泉社。

古賀　俊行

2014　『インドネシア鉄道の旅――魅惑のトレイン・ワールド』、潮書房光人社。

小松　丈晃

2003　『リスク論のルーマン』、勁草書房。

今野　裕昭

2016　「バリ日本人会と日本人社会の形成――日本人会の運営主体の変遷と日本人社会」、吉原直樹・今野裕昭・松本行真（編）『海外日本人社会とメディア・ネットワーク――バリ日本人社会を事例として』、pp. 55-88。

Korpela, Mari

2014　Lifestyle of Freedom? Individualism and Lifestyle Migration, in Benson & Osbaldiston (ed.) *Understanding Lifestyle Migration: Theoretical Approaches to Migration and the Quest for a Better Way of Life*, pp. 27-46.

2016(2009)　When a Trip to Adulthood becomes a Lifestyle: Western Lifestyle Migrants in Varanasi, India, in Benson & O'Reilly (ed.) *Lifestyle Migration: Expectations, Aspirations and Experiences*, pp. 15-30.

Krastev, Ivan

2018(2017)　『アフター・ヨーロッパ――ポピュリズムという妖怪にどう向き合うか』、庄司克宏監訳、岩波書店。

LaMashi, Gary

2003　Bali plots its recovery ... someday, *The Asian Times*, October 10, 2003.（http://www.atimes.com/atimes/Southeast_Asia/EJ10Ae01.html）(2014 年 7 月 29 日取得)

Lewis, Jeff & Belinda Lewis

2009　*Bali's Silent Crisis: Desire, Tragedy, and Transition*, Lanham: Lexington Books.

Luhmann, Niklas

2007(1986)　『エコロジーのコミュニケーション――現代社会はエコロジーの危機に対応できるか？』、庄司信訳、新泉社。

2014(1991)　『リスクの社会学』、小松丈晃訳、新泉社。

MacRae, Graeme

1997　*Economy, Ritual and History in a Balinese Tourist Town*, Unpublished PhD Thesis, University of Auckland.

1999　Acting Global, Thinking Local in a Balinese Tourist Town, In Rubinstein & Connor (ed.), *Staying Local in the Global Village: Bali in the Twentieth Century*, pp. 123-154, Leiden: KITLV Press.

2015　Ubud: 'Benteng Terbuka,' in Putra & Campbell (ed.) *Recent Developments in Bali Tourism: Culture, Heritage, and Landscape in an Open Foretress*, pp. 69-79, Denpasar: Buku Arti.

三上　剛史

2010　『社会の思考――リスクと監視と個人化』、学文社。

2013　『社会学的ディアボリズム――リスク社会の個人』、学文社。

美馬　達哉

2012　『リスク化される身体――現代医学と統治のテクノロジー』、青土社。

見田　宗介
2006　『社会学入門――人間と社会の未来』、岩波書店。
宮本　みち子・岩上　真珠（編）
2014　『リスク社会のライフデザイン――変わりゆく家族をみすえて』、放送大学教育振興会。
森本　豊富・森茂　岳雄
2018　「「移民」を研究すること、学ぶこと」、日本移民学会（編）『日本人と海外移住――移民の歴史・現状・展望』、pp. 13-30、明石書店。
永渕　康之
1994　「1917 年バリ大地震――植民地状況における文化形成の政治学」『国立民族学博物館研究報告』19(2): 259-310。
1998　『バリ島』、講談社。
長友　淳
2013　『日本社会を「逃れる」――オーストラリアへのライフスタイル移住』、彩流社。
2017　「グローバル化時代の移住・移民――かつての移住・移民と何が違うのか？」、長友淳（編）『グローバル化時代の文化・社会を学ぶ――文化人類学／社会学の新しい基礎教養』、pp. 128-134、世界思想社。
中森　弘樹
2017　『失踪の社会学――親密性と責任をめぐる試論』、慶應義塾大学出版会。
中村　文哉
2014　「沖縄ハンセン病者の排除と移動――療養所なき時代における沖縄のハンセン病問題の位相」、谷富夫・安藤由美・野入直美（編）『持続と変容の沖縄社会――沖縄的なるものの現在』、pp. 176-197、ミネルヴァ書房。
O'Reilly, Karen & Michaela Benson
2016(2009)　Lifestyle Migration: Escaping to the Good Life? in Benson & O'Reilly (ed.) *Lifestyle Migration: Expectations, Aspirations and Experiences*, pp. 1-13.
大澤　真幸
2008　『不可能性の時代』、岩波書店。
Picard, Michel
2009　From 'Kebalian' to 'Ajeg Bali': Tourism and Balinese Identity in the Aftermath of the Kuta Bombing, in Hitchcock, King and Parnwell (ed.) *Tourism in Southeast Asia: Challenges and New Directions*, pp. 99-131, Honolulu: University of Hawai'I Press.
Putra, I Nyoman Darma
2011　*A Literary Mirror: Balinese Reflections on Modernity and Identity in the Twentieth Century*, Leiden: KITLV Press.
Putra, I Nyoman Darma & Michael Hitchcock
2009　Terrorism and Tourism in Bali and Southeast Asia, in Hitchcock, King & Parnwell (ed.) *Tourism in Southeast Asia: Challenges and New Directions*, pp. 83-98.

Ramstedt, Martin

2009 Regional Autonomy and Its Discontents: The Case of Post-New Order Bali, in Holtzappel & Ramstedt (ed.) *Decentralization and Regional Autonomy in Indonesia: Implementation and Challenges*, pp. 329-379, Singapore: ISEAS Publishing.

Ritzer, George

2005(2004) 『無のグローバル化――拡大する消費社会と「存在」の喪失』、山本徹夫・山本光子訳、明石書店。

Rose, Geoffrey

1998(1992) 『予防医学のストラテジー――生活習慣病対策と健康増進』、水嶋春朔他訳、医学書院。

齋藤　剛

2018 『〈移動社会〉のなかのイスラーム――モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』、昭和堂。

坂野　徳隆

2004 『バリ、夢色の景色――ヴァルター・シュピース伝』、文遊社。

Salazar, Noel B.

2014 Migrating imaginaries of a Better Life… Until Paradise Finds You, in Benson & Osbaldiston (ed.) *Understanding Lifestyle Migration: Theoretical Approaches to Migration and the Quest for a Better Way of Life*, pp. 119-138.

Sato, Machiko

1993 *Farewell to Nippon, Japanese Lifestyle Migrants in Australia*, Melbourne: Trans Pacific Press

Schulte Nordholt, Henk

2007 *Bali, An Open Fortress 1955-2005: Regional Autonomy, Electoral Democracy and Entrenched Identities*, Singapore: National University of Singapore Press.

Spruit, Ruud

1997(1995) *Artists on Bali*, Amsterdam & Kuala Lumpur: The Pepin Press.

Tarplee, Susan

2008 After the bomb in a Balinese Village, in Connell & Rugendyke (ed.) *Tourism at the Grassroots: Villagers and Visitors in the Asia-Pacific*, pp. 148-163, London & New York: Routledge.

打越　正行

2014 「沖縄的共同体の外部に生きる――ヤンキー若者たちの生活世界」、谷富夫・安藤由美・野入直美（編）『持続と変容の沖縄社会――沖縄的なるものの現在』、pp. 108-131。

上間　陽子

2017 『裸足で逃げる――沖縄の夜の街の少女たち』、太田出版。

Urry, John

2014(2003) 『グローバルな複雑性』、吉原直樹監訳、法政大学出版局。

2015(2007)　『モビリティーズ――移動の社会学』、吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社。
Vickers, Adrian
1989(2000)　*Bali: A Paradise Created*,　Singapore: Periplus Editions.　(『演出された楽園――バリ島の光と影』、中谷文美訳、新曜社。)
2011　Bali rebuilds its tourist industry, *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde* 167(4): 459-481.
2013　*A History of Indonesia*, Second Edition, New York: Cambridge University Press.
Warren, Carol
2007　Adat in Balinese discourse and practice: locating citizenship and the commonweal, in Davidson & Henley (ed.) *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The deployment of adat from colonialism to indigenism*, pp. 170-202, London & New York: Routledge.
山口　節郎
2002　『現代社会のゆらぎとリスク』、新曜社。
山下　晋司
2006　「観光人類学」、綾部恒雄（編）『文化人類学 20 の理論』、pp. 284-301、弘文堂。
2009　『観光人類学の挑戦――「新しい地球」の生き方』、講談社。
吉田　竹也
1997　「バリ島の観光・伝統・バリ研究――楽園の系譜学」、森部一・大岩碩・水谷俊夫（編）『変貌する社会――文化人類学からのアプローチ』、pp. 102-122、ミネルヴァ書房。
2000　「現代バリ宗教と祈り」『アカデミア』人文・社会科学編 71: 143-167、南山大学。
2004　「バリ島ウブドの日本人店舗（２）――爆弾テロ事件以降の出来事をめぐる覚書」『人類学研究所通信』12: 14-25、南山大学人類学研究所。
2005　「バリ島ウブドの日本人店舗（１）――グローカルなビジネスと生をめぐる民族誌」、宮沢千尋（編）『アジア市場の文化と社会――流通・交換をめぐる学際的まなざし』、pp. 107-135、風響社。
2009　「宗教の再選択と経済の選択――バリ島のヒンドゥー・観光・テロ事件」、宮沢千尋（編）『社会変動と宗教の〈再選択〉――ポスト・コロニアル期の人類学的研究』、pp. 33-62、風響社。
2011a　「世界の夜明けのたそがれ――楽園観光地バリの明と暗」『アカデミア』人文・自然科学編新編 1: 1-30。
2011b　「バリ島のエコツーリズムの逆説」『島嶼研究』11: 35-43。
2013a　「シミュラークルと沈黙の絵画――バリ島の観光地ウブドの絵画をめぐって」『人類学研究所研究論集』1: 181-200、南山大学人類学研究所。
2013b　『反楽園観光論――バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』、樹林舎。
2016a　「楽園観光地の構造的特徴――シミュラークル、脆弱性、観光地支配」『島嶼研究』17(1): 1-20。
2016b　「ヴェーバー合理化論の基盤認識と人類学――客観性・因果連関・歴史の叙述」『アカデミア』人文・自然科学編 12: 1-21。

2016c 「バリ宗教の合理化論をめぐる再検討――ギアツからヴェーバーへ」『文化人類学』81(2): 302-311。

2018 「合理化のパラドクスをめぐる覚書」『年報人類学研究』8：137-149。

吉田 禎吾（編）

1992 『バリ島民――祭りと花のコスモロジー』、弘文堂。

吉原 直樹

2008(編) 『グローバル・ツーリズムの進展と地域コミュニティの変容――バリ島のバンジャールを中心として』、御茶ノ水書房。

2016a 「なぜいま海外日本人社会なのか」、吉原直樹・今野裕昭・松本行真（編）『海外日本人社会とメディア・ネットワーク――バリ日本人社会を事例として』、pp. 3-15。

2016b 「「ライフスタイル移民」の光と影――ポスト 3・11 の福島を見据えながら」、吉原直樹・今野裕昭・松本行真（編）『海外日本人社会とメディア・ネットワーク――バリ日本人社会を事例として』、pp. 37-54。

2016c 「日本人社会の多様なネットワーク（3）――群立するネットワーク」、吉原直樹・今野裕昭・松本行真（編）『海外日本人社会とメディア・ネットワーク――バリ日本人社会を事例として』、pp. 225-253。

吉原 直樹、イ・マデ・センドラ、イ・マデ・ブディアナ

2009 「バリの日本人」、倉沢愛子・吉原直樹（編）『変わるバリ、変わらないバリ』、pp. 287-301、勉誠出版。

吉原 直樹・松本 行真

2016 「日本人社会の多様なネットワーク（2）――X 店協賛店をめぐって」、吉原直樹・今野裕昭・松本行真（編）『海外日本人社会とメディア・ネットワーク――バリ日本人社会を事例として』、pp. 207-223。

吉原 直樹・今野 裕昭・松本 行真（編）

2016 『海外日本人社会とメディア・ネットワーク――バリ日本人社会を事例として』、東信堂。

参考ホームページ

Asia Coastal Tourism Destination Development＞Indonesia＞Bali: Expect domestic tourist arrivals to increase

http://thedevelopmentadvisor.com/news/bali-domestic-tourist-arrivals-increase/（2016 年 10 月 26 日取得）

Badan Pusat Statistik（インドネシア中央統計局）＞Economic and Trade＞Tourism＞Sectoral Statistic＞Number of Foreign Tourist Arrivals to Indonesia by Entrance, 1997-2015

https://www.bps.go.id/linkTabelStatis/view/id/1387（2017 年 3 月 17 日取得）

Badan Pusat Statistik Provinsi Bali（バリ州中央統計局）＞Tourism＞Number of Foreign Visitors Arriving Directly by Nationality to Bali, 2013-2016

https://bali.bps.go.id/statictable/2018/02/09/27/jumlah-wisatawan-mancanegara-yang-datang-langsung-ke-bali-menurut-kebangsaan-2013-2016.html（2018 年 4 月 15 日取得）

Keywords

risk society, liquid home, Bali as a “Paradise” touristic site, Japanese Ubud-lovers